
God Only Knows !

瀬川しろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

God Only Knows !

【Nコード】

N8117Q

【作者名】

瀬川しろう

【あらすじ】

神のみぞ知るセカイ・・・そんな物語にある少年が巻き込まれる・・・
神のみが好きな人はぜひ読んでみてください！
オリキャラも登場します。

1 世界はアイで動いてる・・・？ (前) (前書き)

神のみぞ知るセカイの二次創作です。
結構、自分では面白いと思います・・・。

1 世界はアイで動いてる・・・？（前）

・・・さて、まずはこの話がどんな物かを説明しようか。
俺が主人公、名は竹内耕也。

この話は俺が、「神のみぞ知るセカイ」という物語の中に入ったらどうなるか・・・ってヤツだ。

まあ、作者が悪趣味なだけだから、そこは察して欲しい。

といっても、別に俺が駆け魂狩りをするわけじゃないんだ。

俺は桂馬やエルシィの活躍を裏から見てる・・・って感じさ。

あらかた話したから、もう分かるかな・・・。

よし、じゃあ始まり始まりだ！

あ、そうそう。

俺の他にも、オリキャラが数人出てくるから、そこんところよろしく。

（ある日）

・・・とある高等学校、舞島学園。

その学校の2年B組に、ある問題児がいた。

名は桂木桂馬。 17歳だ。

彼はいつもゲームをしている、特に恋愛シミュレーションゲーム・・・。

いわゆる「ギャルゲー」ってヤツだな。

俺は高校になって、そいつと一緒にになった。

そりゃ同級生だ、多少は話したことはあるさ。

だが、桂木からは近づきたいオーラが見えるような気がする・・・。

俺からすれば、ちょっと尊敬するトコもあるんだ。
あの二階堂にも平気で反抗するし・・・、
スゲーのかあいつは。

そんなこんなで、俺は桂木を見張ることにした。
なぜかって？

そこに桂木がいるからさ！

・・・自分で言ってる分かんかった・・・。

お、桂木のヤツ教室を出たな・・・。
よし、つけていくか・・・と思った、その時。

「ちよっとちよっと！ オタメガネー！ーッ！」
ビュンツッ！！

一人の少女が駆けて行った・・・。

・・・？

あれ、今新幹線が通りすぎなかったか・・・？
ドッシイイイインツ！

うっわ！ 思い切り激突したぞ！

俺は思わず声をかけた。

「おい、大丈夫か？」

「ん・・・？ おおおっ！？ ボクのPFPがああっ！」

お前は自分の体よりゲームを優先するのか！？
するとぶつかった少女が一言。

「ごめんごめんっ！ スピード出過ぎてブレーキの限界超えてた」
こいつは、同じクラスの高原か・・・。

「あのさーオタメガネー。今日の屋上の掃除、一人でやっというくれない？」

ほら、私あんたと違っていそがしいからさ」
なんだこいつは、ぶつかるのとバカにするのを
同時に行いやがったぞ・・・。

俺がそんなことを考えていると、桂木がけっこうな大声で
「ふざけるな！ 断固断る！」

時すでに遅し。

高原はハウキにヨロシクと書いた紙を貼り付けて去った。
ドッシィィィンッ！

・・・またぶつかったぞ・・・。
今にあいつ死ぬんじゃないのか・・・？

く屋上にてく

「まったく、何でボクがこんなことを・・・」

桂木は屋上掃除をしていた。

とりあえず、俺は桂木に話しかけてみた。

「よ、よお桂木」

すると、普通なら言わないであろう言葉が・・・。

「・・・誰だお前？」

・・・見知らぬ人に「誰だお前」って・・・！
てか、同じクラスなのに知らないんだ・・・。

「俺は竹内耕也、お前と同じクラスだよ」

「だから何だ？」

・・・こいつ友達いねえな・・・。

絶対いねえな・・・。
つか、いるんじゃないぞ。

「・・・ま、いいか。掃除は終わった。

しかし、なんて理不尽な奴らだ・・・。少しはゲーム世界の女子を見習え！」

俺は感じた。

こいつと仲良くなれば、何か起きそうな気がする・・・。
そう感じた・・・。

「ボクが好きなのはゲーム女子だけさ・・・。現実なんてクソゲーだ！」

うおおお、すごいこと言った！

何か知らんが、こいつはスゴイ！ような気がする！

桂木はPFPを取り出し、そしてものすごいスピードで
メールを打ち始めた！

『初めまして！落とし神です！「ゴスゴスパニック」ですか！
あれはみんな苦勞してるみたいですね！』

『こんにちは！落とし神です！「あきいろ」いいゲームですよね！
さて攻略の方ですが・・・』

早い！こいつスゲー！

・・・ただ、さっきから気になってるんだが・・・

「桂木、落とし神って何なんだ？」

「フッ・・・、現実なんて所詮、仮そめの世界。
ゲーム世界にとどろくボクの真の存在・・・！」

「落とし神！」

ふうん、こいつ案外すごいんだな・・・。

『送信したよ！』

「ふう、さて次のメールは・・・」

「ん？・・・何だ、このメール？」

『落とし神へ』

どんな女でも落とせるといふ噂を聞く。

まさかとは思うが、本当なら攻略

してほしい女がいるのだ。

自信があるなら「返信」ボタンを

押してくれ。

PS・・・ムリなら、絶対に押さないように！

ドクロウ・スカール
』

「・・・なんだ？この挑発のアロマが漂うメールは・・・。

ボクを誰だと思っているんだ・・・？」

「お、おい桂木、ムリなら押すなって書いてあるぞ・・・」

「フ・・・」

「神は、逃げない！」

桂木は「返信」ボタンを押した・・・。

その瞬間・・・！

ドオンッ！

「！？」

激しい爆発的なことが起こり、そこから・・・
1人の女の子・・・が降りてきた・・・。

「ご契約ありがとうございます、神様！」
神様・・・？

桂木のことか・・・？

女の子は桂木の手をとり、

「さあ、参りましょう！」

駆け魂狩りへ！」

その瞬間、女の子と桂木・・・え？あれ、俺も？

その3人が、空へ浮かび上がった。

そして、空を飛んだ・・・。

「ちょ、何で俺まで・・・！？」

（教室）

「・・・なんだ？ 今、空飛んだか・・・？」

「桂木・・・、何か知らんがお前のせいだぞ・・・」

「落ち着け・・・現実に呑まれるな・・・」

順序だてて論理的に考えれば問題はない」

桂木は自分に言い聞かせるように、言った。

俺も、今なにが起きているか分からない・・・。

「よし、整理しよう。まず、お前は何者だろうか？」

「私、エリュシア・デ・ルート・イーマと言います！」

みんなはエルシイって呼んでます！

地獄から派遣された「駆け魂隊」の悪魔です！」

・・・。。。。。。。

『ホホウ、なんのこっ茶でござるか。』

『まこと雅よのう・・・』

・なんのこっちゃ!!

「桂木、どうにかしろ・・・」

「・・・君子危うき3D女に近寄らず!

ここは関わらないのが得策だな・・・」

・・・・え?　ということは・・・

「さて今日は木曜か。　ゲーム買いに行くか」
無視かよ!

エルシイとかいう子はどうすんだよ!

「待ってください!」

そう言ったかと思うと、エルシイが桂木に近づいてこう言い放った。

「気をつけないと・・・首、取れちゃいますよ・・・?」

・・・今、何て言った・・・?

桂木は首に手をあて、「首?」と聞き返した。

・・・すると、

「・・・な、なんだ?　この首輪?」

・・・首輪?

・・・待てよ、俺は関係ないハズだよな。

じゃあ、俺は帰るか・・・。

「待て、竹内。　帰るな」

・・・すいません。

エルシイは桂木の質問に答えた。

「神様は、悪魔と契約されたんですよ。

契約書を送られましたよね?　室長のドクロウさんあてに・・・」

桂木は少し考え込み、「あのメールか!？」と発した。
だから、俺はあの時止めただろ。

まあ、桂木もこんなことになるとは思ってなかったんだろうが・・・

「地獄の契約は厳しいのでご注意ください。

もし契約を達成できなかったり、許可なく破棄してしまいますと・
」

「・・・どうなるんだよ?」

俺はなぜか質問していたよ。

自分と関係のないはずなのにな・・・

「その首輪が作動し、首をもぎとります・・・」

・・・なにいいいっ!?

それって、下手すると桂木が死ぬってことだよな・・・?

桂木が大声で言った。

「ふ、ふざけるなアア! 早くはずせええ!」

しかし、エルシイは何でもないかのように

「大丈夫ですよ! 駆け魂を捕まえれば外れますから!」

「駆け魂・・・? 何だそれは・・・?」

俺が聞いたその時、エルシイの頭についているドクロが音を立てた。

ドロドロドロドロ・・・

「来ました! 駆け魂です!」

そして俺たちは、教室の窓からグラウンドを見渡した。

すると、列を作っている女子がいた。

陸上部か。

「あの先頭の娘!」

マジでか・・・？ こいつ、マジか・・・？

・・・

「ひどい・・・ひどいです神さま・・・、お遊戯の神さまだったなんて・・・」

「・・・とにかく、勘違いだと分かったんだ。

さっさと契約を解除しろ」

そだな、勘違いなんだから。

この際は致し方のないことだな・・・。

しかし、エルシイの答えは俺の予想を反した。

「すみません・・・、できません・・・」

「・・・何イ！？」

「せめて・・・あの・・・、私も一緒に死にますので・・・」

「契約は対等・・・、協力者が死んだら悪魔の首も飛びますから・・・」

「・・・！！」

・・・突如、俺と桂木（全般的に）が巻き込まれた駆け魂狩り・・・。
ここから、俺の高校生活が少しずつ変わっていくことになる・・・。

2 世界はアイで動いてる・・・？（後）

なんかかんやで桂木は駆け魂狩りとやらの巻き込まれた。

俺は関係ない、とは言い切れない。

俺は契約の現場を、この目で見たからだ。

そして桂木とエルシィはたそがれていた。

ヒュウウウ・・・

「ああ、こんなに近くに駆け魂がいるのに・・・

掃除しかできないなんて・・・」

「静かにしろ、首が飛ぶ前にやり直すゲームを書き出してるんだ・・・」

桂木のヤツ、完全にヤケじゃないか・・・？

だが引つかかることがあったので、俺は桂木に聞いてみた。

「なあ桂木、お前落とし神とか言ってたよな？

だったら、現実の女子もゲームのように落とせるんじゃないか？」

俺はもっともらしいことを聞いてみた。

「ゲームと現実を一緒にするな」

桂木はグラウンドにいる陸上部を見て、

「あれが陸上部？　ボクに言わせればあんな精度の低い陸上部はない」

・・・精度？

「誰も、髪をくくっていない！」

「・・・髪？　それがどうしたんだ・・・？」

俺は思わず聞き返した。

すると桂木は、けっこうな大声で

「ふざけるなッ！　陸上部女は髪をくくってるもんなんだよ！」

「お前のこだわりはよくわかった」

「まったく、あいつらは髪をとめるゴムに魂が宿るのを知らないのか」

魂なんて宿るの？

すごいねそれは。こいつは正真正銘すごいよ。

「あんないい加減な世界の女子、攻略できないな」

「いい加減なのはどっちなんだろうか・・・、わかんなくなってきたぞ・・・」

そのとき、エルシィが騒ぎ出した。

「か、神様！ あ、あれ、あれ！」

「・・・ん？」

俺たちはエルシィの指差す先に目をやった。

その先で歩美が

「よーっし、本気だすぞー」

歩美が髪をくくった・・・。

「髪くくりましたよ、神様！」

「スゲー、桂木の言うとおりになった」

「ぐ、偶然だよ！ まだ足りないところがあるぞ」

まだあるのか。

「短パンの陸上部もゲームじゃありえない。ブルマじゃないと動けないな」

桂木がそう言い放った途端、

突然歩美を含む陸上部女子全員の服が変わった・・・！

「え・・・？ ええ・・・？」

俺は驚きを隠せなかった。

無論、桂木もだ。

「羽衣を変形させて飛ばしました、外見だけなら私でも変えられます」

なるほど、その羽衣か。

「でも、あの娘の内側を変えられるのは神様にしかできません！」

「やりましょう、神様！」

（翌日）

というわけで桂木の駆け魂狩りが始まった。
なぜか俺も付き合わされることになった。

「桂木、いきなりやるな」

「当たり前だ、とっとと契約を終わらせるためだからな」

桂木はデッケー横断幕を張っていた。

そのとき、桂木は思い切り中に浮かび、地面にたたきつけられた。
冷静に分析できる俺もすごいがな。

桂木を蹴り上げたのは、例のごとく歩美だ。

「オタメガーッ！ 何なのさ、この恥ずかしい横断幕は！」

気持ちは分からんでもない。

俺だって似たようなことされたら怒るわ。

あ、首絞められてる。

次やったら殺すという冷酷な宣言を受けた桂木に、
初めて話しかけたときみたいに声をかけた。

「大丈夫か桂木？」

「命さえかかってなきゃ誰がやるか、こんなこと・・・」

「大変だな、お前も」

いつの間にか、俺と桂木は少しだけ、仲良くなっていたような気がする。

それから3日間、歩美の攻略は続いた。

だが、歩美を怒らせるだけだった・・・。

「・・・攻略は順調なのか？俺から見ると、

どんどんキラわれてるような気がするんだが・・・」

すると桂木はゲーム理論を語りだした。

「ゲームではな「嫌い」と「好き」は変換可能なんだよ。

キラわれるようなイベントも、ちゃんとプラスになってるんだ」

ふうん、でもそれゲームの話だろ？

「ところで、あの悪魔はどこへ行ったんだ？」

「ああ、それね。実はエルシィから頼まれて、俺が代わりにそばにいることになった」

「・・・何だその設定は。何でそんなことになった？」

「あー、そばにいるっていつでも、エルシィがいられないときだけ近くにいてるってことだ」

「ふうん・・・」

エルシィとそんな会話を交わしたのは4日前だ。

どうやら俺も一緒に巻き込まれたのは、

俺を、桂木とエルシィのつなぎ役にする為だったらしい。

「ん？」

あ、歩美が先輩にたかられてるぞ。

それはちよつと違うか・・・。

ふうん、あんな先輩って現実にいるんだな・・・。

さて、エルシイが戻ってきたので俺はしばらくのんびりしている。

「お、耕也じゃんか」

「・・・ん？　なんだ、白川か」

「なんだとはなんだよ、つれないな」

こいつは白川雄二、俺の幼なじみみたいなものだ。

「どうした、耕也。　少しやつれたな」

「ああ、まあ家族のこともあるしな・・・。　それに・・・」
駆け魂狩りについて語ろうとしたとき、ストップがかかった。

『駆け魂狩りのことは、関係者以外には
誰にも話さないでください、お願いします！』

・・・と、エルシイに言われていたのだ。

「それに・・・なんだよ？」

「だから・・・、勉強してたんだよ、勉強」

「お前が勉強ねえ・・・。　ま、いいや」
いいんだ。

俺ってそんなに勉強してないように見えるの？

まあ、実際してないんだけどな。

「それより耕也、知ってるか？　かのんちゃんの新曲！」

「かのん・・・？　何だそれ？」

「うお、かのんちゃんをご存じない？

今、大人気のアイドルだぞ！」

あいにく、あんまり興味ねーな。

「まったく、少しはそういうの・・・ん？」

「あれ、アドバルーンか？ 懐かしーな。

・・ドクロ・・。 もしや」

「どうしたんだ？」

「いや、ちょっと用ができたからまた今度な」

ドクロってことはエルシィだな・・。

「桂木、何だこれは？」

「アドバルーンだ」

知つとるわ、んなこと。

「でも、攻略は順調みたいだな」

「はい！ これだけ応援して勝てれば、

歩美さんもきっと神様のことを好きになります！」

確かにエルシィの言うとおりだな。

・・だが、桂木は納得してないように見えるな・・。
ま、いいか。

その時、グラウンドのほうが騒がしくなった。

「ええー！？ ねんぎ！？」

「大会は明日なのに・・。」

どうやら歩美がハードルの途中に転んで、
ねんぎをしたらしい。

しかし、これで攻略は絶望的な状況になったぞ・・。

「もう絶望的です・・、大会で優勝してもらわないと私たち・・。
エルシィが落ち込む中、桂木は・・

「ケガ・・先輩・・ハードル・・応援・・。」

「お、おい桂木・・？」

まさかお前まで絶望に追い込まれたんじゃ・・。」

「見えたぞ・・・、エンディングが・・・！」

それから数分後・・・。

桂木は歩美を呼び出した・・・、攻略は終盤へ来たようだ・・・。
ちなみに俺とエルシイは影で見張っている。

あ、なんか口論してるけど・・・、大丈夫か・・・？

「エルシイ、あいつら何言ってるか分かるか？」

「ええーつと・・・、耳をすませばなんとか・・・」

こいつの頭は幼稚園児以下か・・・？

耳をすます以外に方法を思いつかんのか？

ま、いいか。

・・・・・・

あ、何か果物投げられてる。

ギャルゲーってこんなのだっけ・・・？

「ところで、駆け魂ってどうやって捕まえるんだ？」

「あ、はい。それはこの勾留ビンを使ってですね・・・」

「な、何かド○えもんの道具みたいだな・・・」

「？　　何ですか、それは？」

「こっちの話だよ」

「まあ、見ててください！　駆け魂が出たら・・・」

ボシユウウツ！

おいしいいいい！　言ってるそばから出たぞ！

桂木、少しは空気読め！

エルシィは危なげなく駆け魂を捕まえることに成功。
攻略は無事終了した。

.....

「攻略の記憶を失っていたって？」

「ああ。攻略期間の記憶だけきれいにな」

「ふうん、まあその方が好都合だろ」

「・・・」

ん？　　そういや、エルシィはどこ行った？

すると、周りに男子生徒が集まってきた。

「おい、オタメガ！」

「どこに隠してた、あんなの！」

「え？　　え？」

彼らの指差す先には、

舞島学園の制服を着たエルシィが立っていた。

3 あくまでも兄妹です……。(前) (前書き)

耕也「さて、お待ちかねの第3話だ！」

作者「作者名を「瀬川しろろ」に変えたよー！」

耕也「この場を利用して宣伝するな」

3 あくまでも兄妹です・・・（前）

俺は竹内耕也、舞島学園に通う高校2年生だ。

今、俺が見つけた面白いやつ「桂木」と

その協力者のエルシィバディと一緒にいる。

なんと、エルシィは桂木の妹を名乗って、

この学校に編入してきたのだ。

まあ、こいつらの会話はそれなりに面白い。

さて、攻略が一通りすんだところでちょっと俺の生い立ちでも聞かせようかな。

そんな嫌な顔すんなよ、一応主人公だからさ。

こういうのはやっとなかいかないといけないの。

俺が5歳の時に母親が死に、さらに7歳の時に父親に捨てられた。

その後は祖父母の家でくらし、まあそれなりに楽しい生活だ。

でもその祖父母のうちのじいちゃんちゃんは2年前に死んだ。

ばあちゃんも体が悪くなり、入院している。

兄弟は兄が1人いるが、もう独り立ちしていて

ちゃんと仕事もしている。

つまり俺は、祖父母の家だけを借りて1人暮らし状態ってわけだ。

そろそろ祖父母の家も離れなければいけないのだが・・・

そう簡単にはいかないからなあ・・・

はい、ではお待ちかねの本編だぞ。

ついてくるエルシィに桂木は怒鳴っていた。

「ついてくるな、もうお前とは接触しないぞこの悪魔め！」

「ま、待ってください、私まだ人間界の右も左も分らないんですー」

「お前もどこまでついてくる気だ」

え？ 俺？ 俺も？

「言われた通り駆け魂は捕まえたぞ！ このギロチン首輪、早く外せ！」

「まだ契約は終わってません、駆け魂を一匹捕まえただけです・・・」

「この街にはまだ、たくさんの駆け魂が潜んでいます
ま、街？

「それってさ、舞島市全体にいるってことか？」

「はいっ」

うおー、かわいい顔してトンデモないこと言ったー！

「この街中の駆け魂を全部捕まえろって言うのか！？」

「ですから、私も更に神様に協力できるように

室長に頼んでいろいろ手続きをしてもらいました！

妹で同じクラスならずと一緒にいられますので」

妹なのに同学年ってのもおかしいと思うけどなあ・・・。

が、エルシイの今の発言に桂木が

「お前まさか、家にまで来るつもりじゃないだろうな？」
と。

エルシイは不思議そうにこういった。

「・・・こちらでは兄妹は同居しないのですか？」

「だから妹じゃないだろ！」
何なんだこのコントは・・・。

・・・・・・・・・・

「まあ、いいじゃないか。協力者^{バディー}なんだから同居ぐらいしたって」

「フン、血の繋がってない妹など、真の妹ではない！」
いつもながら、何を言っているのだこいつは。

「現実^{リアル}への譲歩もここまでだ！」

家への進出なんてさせるものか！」

「やる気だねえー」

（桂木宅）

「まあ珍しい！ 桂馬に友達が2人もいたなんて！」

「友達じゃない」

ていうか、珍しいって！

コイツそんなに友達いないのか？

あと「2人も」じゃなくて「2人しか」だろ！

「座って座って、ウチ席だけは沢山あるから」

桂木の母に案内されて、俺たちは席についた。

母親・・・か・・・。

「優しそうなお母様ですね」

「ここ、喫茶店なのか？」

「ああ、じいちゃんからもらったらしい」

俺たちが会話していると、桂木母が飲み物を持って戻ってきた。

「で、今日は何の御用―？」

聞かれたので俺が答えようとしたのだが、
どう答えてよいやら分からなかった。

とか考えていると、エルシイがこう言った。

「私たち、ここのお父様の隠し子です」
ガシャン！

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

あれ？今、私「たち」って言わなかったか・ ・ ・？

「・ ・ ・ ホホホ、面白い子・ ・ ・」

「これ、死んだ母からの手紙です」

「どれどれ・ ・ ・」

手紙を読み終えたであろう桂木母は電話を取り出し、どこかへかけた。

「もしもしあなた？ うん、私よ・ ・ ・」

次の瞬間、とてつもない剣幕で・ ・ ・。

「・ ・ ・ 話、聞かせてもらおうか・ ・ ・？」

その後、いろいろと物を蹴りだした・ ・ ・。

「か、桂木・ ・ ・、アレは・ ・ ・？」

「・ ・ ・ ウチの母さん、元暴走族なんだよ・ ・ ・」

「マジか・ ・ ・。 で、あの手紙は何なんだ？」

「室長入魂のニセ手紙です」

おい！ ニセ手紙かよ！

そのせいで桂木父はとんでもないレツテルを貼られているんだぞ！

で、俺は気になっていたことを聞いてみた。

「でさ、さっき「私たち」って言わなかったか・・・？」

「あ、はい。ちょっと調べさせてもらいましたけど、

竹内さんは身寄りがおらず、一人暮らしなんですよね」

「あ、ああ」

「竹内さんは一応、契約時に一緒におられましたし、

関係者として扱ってますので、一緒に暮らしていたほうがいいと

室長が・・・」

は、はあ、そうすか・・・。

俺は桂木の父親の隠し子となってしまうたのか・・・。

すると、桂木母は電話を壁に投げた。

「もう帰ってくんない！」

・・・怖いんですけど・・・。

「桂馬、父さんのことは忘れな！ ヤツはもう死んだ！」

おおい！ 勝手に殺していいんですか！？

「安心おし！ あんたらの面倒は私が見る！」

「待て待てーっ！」

こうして桂木宅に住むこととなった。

～とあるゲームショップ～

「ボクは認めないぞ！」

「でもお前の母さんは一緒に住んでいいって言ってたぞ」

「その代わり1人追放されそうだ」

「私なんでもします！ 一緒にいさせてください！」

「ダメだ」

すると桂木はいつになく真剣な表情になった。

「竹内はまだいいとして・・

お前と、一緒に住むことはできない」

「お前は、妹として設定が甘い」

・・・はいい？

せ、設定だと・・？ 予想外の理由だ・・。

「お前たちにいい言葉を教えてやろう」

「いや、別にいいよ」

「聞け、今は聞くとときだ」

妹の

品質示す

エンブレム

B M W

けいま

・・え？ 川柳？ なぜに川柳？

しかもBMWで・・。

「・・で、そのBMWとは？」

「それは妹が妹であるための基本条件。

まず「B L O O D」血縁！ 血が繋がっていること！

義妹とか妹分みたいな軟弱キャラは所詮他人他人！」

「は、はあ・・。 まあそれは仕方ないか」

「そして「MEMORY」二人の思い出！

家族ならではの質量そろった思い出！　これぞ兄妹の代えがたい絆！」

「な、なんか怖いよお前・・・」

「何より兄をうやまう心。　「WONICHANMOE」！」

・・・・・・。

「最後のひとつ、急に苦しくなったような・・・」

「お、限定版まだ残ってる」

無視か、おい。

「せ、設定なんて別にいいと思いますけど・・・」

「別にいいで済ましてきた結果、現実^{リアル}は腐ってゆくのであります」
「おい、ここに一般常識人がいるのをお忘れでは？」

それにその理屈だと、俺はいつたいどうなる。

「だいたい、お前とは思いつくはないし！　ボクをひどい目にあわせるし！」

そもそも同じ血が流れてないだろーが！！」

桂木がそう言った途端、エルシィが桂木の指に噛み付いた。
で、噛み付いたときにでた血を飲み込んだ。

「これで・・・同じ血が流れましたよ・・・」

いや、俺が思うにそういうことじゃないと思う・・・。

「私、なんとしても駆け魂狩りを続けたいんです！

どうかおそばに置いてください！」

さすがに桂木も少し参った様子だったが、やはり・・・

「こ、断る！」

桂木はゲームを買って、そそくさと帰ってしまった。

「神様、また難しいこと言っていました・・・」

「うーん、よーするにいい妹になればいいってことじゃないか？」

俺がそういうと、エルシイも希望がわいて来たようだ・・・。

「なるほど！　そういうことですね、がんばります！」

　　で、再び桂木宅

エルシイは桂木の部屋のドアをたたいていた。

「おにーさまーっ！　神様でおにーさま・・・、神にーさまーっ！」

「なんだお前！　出てけよー！」

「まあ、落ち着けよ桂木」

「とゆーわけで私が夕食を作りました！」

「何かとゆーわけだ！」

確かにそこは接続がおかしい。

しかもエルシイの羽衣で桂木はいすに縛り付けられている。

「はい、どうぞ！　ペスカトーレ三途仕立て！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

・・・・・・・・。。

「あ、あの・・・、これは・・・？」

「はい、三途の川の魚を使ってるんですよ！」

こちらに来る前に沢山つっておいたんですよ！」

三途の川あ？　あそこって魚いるの？

「・・・な、なんつーか、桂木。ドンマイ・・・」

「そう思うなら見てないで助ける！」

桂木は、この食べ物かどうかわからない物体をエルシィに無理やり食べさせられている。

桂木、これで死んだら俺が敵をとってやらなくもないぞ・・・。

だが、桂木の発した言葉は超意外だった・・・。

「意外とうまいな・・・」

マジでーーーーー!?

何か口の中から悲鳴的なものが聞こえるが・・・。

しかし、エルシィは意外とやるのかもしれない・・・。

そう思う俺であった。

・・・あ、後半へ続きます。

3 あくまでも兄妹です・・・ (前) (後書き)

耕也 「次回は後編だぞ！」

4 あくまでも兄妹です・・・ (後) (前書き)

瀬川 「さて、今回は耕也の秘密があきらかに！」

耕也 「秘密ってほどでもないけどな・・・」

4 あくまでも兄妹です・・・（後）

（引き続き、桂木宅）

夕食を一通り食べ終わったあと、エルシィがこう切り出した。

「なにか気づきませんか？ 神に（さま）」

「？」

・・・そういえば、この部屋異様にキレイだな・・・。

「この部屋もほかのお部屋もお店も、私が掃除しておきましたっ！」

「掃除ってレベルなのかコレ・・・？ 新築みたいだぞ・・・」

「エヘヘー、何しろ私は掃除係を「300年」やってましたから！」

「さ、300年！？」

「はいっ、このハウキさんとは298年の付き合いです」

300ねんって・・・、見た目は完全に俺たちと同じ年くらいだぞ・・・。

「このハウキさんはスゴイんですよー、魔力がこめられていてですね・・・」

「魔力？」

「はいっ。たとえば、神様の食べ残し。」

「こんなのは最小パワーで十分ですっ、ひとなで集まりますよ」

そう言ってエルシィはハウキで床をはわいた。

ドオオオオオンッ！！

・・・。

「・・・おい・・・」

「あ、パワー最大になってました・・・」

「アホかあつ！」

さらにその後、ぐるぐるという音が響き、桂木がトイレへ駆け込んだ。

「腹いてー！ さっきのヤツだ！ くそお、どっちから怒ればいいんだあーっ！」

「すみません、すみません！」

（で）

桂木は今、入浴中だ。

で、その後になぜかエルシイが入っていったが、桂木のことだから相手にはしないだろう。

・・・はあ、一人で暇だな・・・。

・・・。。。。。

・・・家族か・・・。

『ねえ父さん、何で母さんはいなくなっちゃったの・・・？』

『・・・母さんは・・・ちょっと旅に出ているだけだよ。』

きつとすぐに帰ってくるさ・・・』

・・・でも母さんは帰ってこなかった。

当然だ、死んでいたんだから。

死んでしまった人間は決して戻ってはこない・・・。

それからしばらくして、学校から帰ると手紙が置いてあった・・。

『耕也へ、実はちょっと前に父さんの働いている会社が』

潰れてしまったんだ。でもウチには借金がある。

だから、この家を売ることになった。お前はじいちゃんの家に行きなさい。

父さんのことは忘れてくれ。』

母さんが死んで、頼れる人間は父さんだけだったから
そのときは裏切りだと思ったが、時がたつにつれ
仕方がなかったのだと思うようになった。

そして、俺は祖父母の家で生活をした。

しかしじいちゃんが死んでしまい、ばあちゃんも入院してしまった。
そんな俺は今の今まで一人暮らしで寂しい思いをしてきた。
でもそれは、解決できるかもしれない。

解決手段は今、目の前にあった。

・・・。。。

・ 考え込んでいると、どこからともなく
「ありがとうございます！」
・ え？

「・・・まったくうるさいヤツだな・・・」

「どうかしたのか？」

「ああ、アイツをウチに置くことにした・・・。
残念ながらコレが最善の手だからな・・・」

・ そうか。

あの寂しい思いを、今なら解決できるかもしれない。
でもそれは言い出せなかった。

「あ、そうだ。 お前たしか身寄りがないって言ってたな？」

「あ、ああ・・・」

「ついでだから、お前もウチにいろよ。」

それとこの際だからボクのことには桂馬と呼べ。

ボクもお前のことは耕也と呼んでやる」

「え・・・？ 俺の下の名前、覚えてたのか？」

「当たり前だ、ボクを誰だと思っている」

おそらく声になっていなかっただろうが、

俺は桂木桂馬に「ありがとう」と言った・・・。

「あ、神様！ 私、お風呂場でいーことしたんですっ！

神様のゲーム機、キレイにしておきましたよーっ！」

エルシィの手の上にはピカピカのPFPがあった。

「お、おい・・・水洗いしたのか？」

「いえいえ、もう念入りにせっけん洗いですよ！」

「やっぱ今すぐ出てけ、お前はーっ！」

「ええーっ、神様ーっ！」

ここ桂木邸で、俺の新たな生活が始まろうとしていた・・・。

4 あくまでも兄妹です・・・。(後)(後書き)

瀬川 「次回から美生編スタートだ！　こうご期待！」

5 ベイビー・アー・ユー・ア・リッチ・ガール・・・？（前書き）

作者「さあて、ついにアニメ本編では2期が開始！」

耕也「それなのにこの小説ときたら、まだ美生編の途中だよ」

作者「うるさい！ 書き始めが丁度1期の終わり頃だったんだよ！」

耕也「うるさいとは何だ。 ていうかお前、3月だけ何も更新してねー

じゃねえか。 何やってたんだよ！」

作者「いや、その頃は受験やら何やらで忙しくて・・・」

耕也「・・・な、何か・・・その・・・ゴメンナサイ・・・」

5 ベイビー・アー・ユー・ア・リッチ・ガール・・・？

俺は竹内耕也、とある事情で桂木桂馬の家に住んでいる。
今、俺たちは登校中だ。

「お前さ、登校時もゲームしてんのな」

「当然だ。今こうしている間にどれだけのギャルゲーが出ていると
思っているんだ」

知らないし、正直知りたくもないです。

（舞島学園）

「しかし改めて見ると、大きな学校ですねここは」

「まあな、田舎で土地が余ってるし、中等部も一緒だからな。
となりは大学まであるぞ」

へえ、それは俺も知らなかったわ。

「思ってたんですが、女の人が多いですね」

「ああ、それはもともと女学院だからだよ。男は200人くらい、
それに対して女子は1000人近くいるんだぜ」
「1000人!？」

「若い女子の集まる場・・・駆け魂の絶好の逃げ場所です・・・」
絶好の逃げ場？

「女の中にしか逃げないのか？」

「はい、駆け魂は女性の中にしかいません」

「なんで？」

「隠れた女性の子供として転生するからです」

・・・。

・なるほどな・・・、そういうことか・・・。

ワアツ

「ん？ 何だ？」

「ああ、外パンだろ」

「外パン・・・って何だ？」

「知らないのか。うちの学食は高いから、

みんな学食前の売店のパンを買ってるんだ」

「ほお、知らなかった。俺はいつも弁当だったからな・・・」

「ん？ お前、身寄りがなかったんじゃないのか？」

「ああ、自分で作ってたんだよ。料理だけは得意だからな」

そうそう、じいちゃん家でよく作ってたな・・・晩御飯とか・・・。

「ところでオムそばパンってなんですか？」

「焼きそばパンを卵で包んであるんだ。ソースがオリジナルで美味いらしい」

「へー・・・、おいしそう・・・」

ずいぶんと小市民なアクマだな・・・。

エルシイがかなり食べたそうにしてるので

「何なら1つ買ってやろうか？」

「ほ、本当ですかー！」

・・・そのとき。

ドロドロドロドロドロ・・・

「きました！ 駆け魂サイン！」

「そのドロドロ音、どうにかならないのか？」

「これは結構近いですよ・・・！」

「やっぱりあの人ごみの中か？」

「いえ・・・、あそこではないような・・・」

すると、突然ツインテールの少女が現れてこう言い放った。

「静かに！　その庶民たち！」

「なんか偉そうなやつだなあ・・・」

「森田・・・、前から気になっていたあの人ばかりはなんだ？」

「外パンでございます。金に不自由な民のために慈善で設けられた施設ですな・・・」

ずいぶんないようだな、オイ。

「変なものが売っている・・・、オムそばパンだと」

変なものて・・・、エルシィが相当欲しがってたヤツだぞ、ソレ。

「・・・一つもらおう」

もらうんかい！　変なものの扱いしといて最終的にはもらうんかい！

「オムそばパン　一個100円ね」

そういわれた少女は一万円札を取り出した。

いやいやいや、さすがにお釣りがなくて・・・。

「一万円？　お釣らないよ、小銭ない？」

ホレ見ろ。

「悪いが生まれてこの方、小銭なんてもってない。

この金で買えるだけもらおうでしょう」

・・・オムそば終了ー！！。

ていうか、小銭持っていないってスゴイな。

あれだな。　三〇院ナ〇みたいだな。

で、オムそばパンの終了にいろいろ訴えるヤツらに少女は、
「わめくな庶民。私のように金持ちになれ」といった。

「で・・・駆け魂の持ち主って・・・」

「はい・・・あの娘こです・・・」

・・・こりゃまた大変なことになりそうだなあー・・・。

青山美生 16歳 高等部 2年A組

青山中央産業令嬢、1月2日生まれ。 右投げ右打ち。

「・・・最後の右投げ右打ちっていらんじゃないか・・・？」

「？ 何の話だ・・・？」

「なあに、こっちの話だ」

「それにしてもあの態度、許せん！ 私たち庶民のオムそばパンを！」

「「お前は庶民じゃないだろ」」

俺と桂馬は口をそろえて言ったよ。

「それにしても、あんなキツそうな子を落とすなんて・・・、またこれは骨が折れそうです・」

「そうだそうだ。 降参するなら今のうちだぞ桂馬」

「命がかかってるのに降参なんかするか。」

それにまだ楽そうデホツとしたところだよ」

「またまたあ、そんな冗談を」

「ボクが冗談を言うように見えるか？」

・・・。

「どちらかというと見えん」

「お前たちにいい言葉を教えてやる」
またか・・・。

ツンキャラは

ビュアネス

純粹守る

鎧だね

アイアンヴァージン

けいま

だから何故に川柳なのだ？

最後のアイアンヴァージンがイマイチよく分からん・・・。

「あのタイプは派手な鎧で固めてはいるが、

中身は繊細で普通以上にピュアだ。

よって、鎧さえ破れればデレッツと柔らかい気持ちが出てくる」

「話してもいないのに分かるのか？」

「分かる」

「猫目で、明るい髪色で、デコが出ててツインテールの女は

99%！ そーゆー女なんだよ！」

あ、そこは100%じゃないんだ。

「300人は見たな」

「ゲームでだろ、どうせ」

「当然！」

言い切るなよ。

「あれでチビならもう100%だな」

「んー？ いや、チビとまではなかったような・・・」

・・・そういや、すごい上げ底のブーツ履いてたな・・・。

コイツ、意外と観察力はスゴイのかもしれない・・・。

「でさー、どうやってアイツの鎧を・・・」

・・・ってあれ？ 桂馬は・・・？

教室のほうを見ると・・・いた。

「いたいた、瞬間移動したかと思ったよ」

すると突然桂馬はエルシィに向かって・

「オレ・・・お前のことが好きだ」

「初めて会ったときから・・・ずっと」

・・・・・・はあああああああつ！？

それを聞いたエルシィは照れて教室を破壊している。

・・・・・・破壊？

「やめろ！ これ以上あらすなああ！」

俺がエルシィをなだめていると、桂馬が

「どうだった、今の告白？」

・・・はい？

「どーもしっくり来なかったないまのは。

こんぷれすらぶの方がいいかな・・・」

「桂馬、今のは・・・？」

「先制パンチだ」

「先生パンチ？」

「先制だ。 攻撃的なタイプは意外と打たれ弱いもんだ。

相手のペースにさせないようにしないと」

「ふむふむ」

「最初の出会いでいきなり告白する。こっちから開幕パンチってわけだ。」

だからプレイしたゲームの告白シーンを選び出して、いいセリフを練習しておかないとな」

・・・なるほど。

「じゃーさっきのは冗談だったのか」

「大体使えそうなのは書いた。順番に言うから印象的だったのを選んでくれ」

「・・・わ、私が・・・？」

「では2番目だ。はい、アクション！」

「ずっと君を見てた」

ガタン！

「お、おふざけでも照れくさいですね・・・」

「ふざけてなんかいない！」

本気なんだ！ 君以外のことは考えられない！」

「・・・は・う・えうあうえう・・・」

「紙をしっかりと見ろ！ こーゆーセリフだ！」

大丈夫なのか、これで・・・。

ゝそんなこんなで次の日ゝ

「好きだ。付き合ってくれ」

桂馬が美生にそういうと後ろから

執事らしき人が出てきて桂馬をなんやかんやした。

「わー！ ギブギブ！」

「・・・痛そー・・・」

「フン、庶民ね」

車に乗り、美生は行ってしまった。

「ど、どうして断るのでしょー!?」

ありえないですよー!」

「眉一つ動かさなかったな・・・」

確かに断られるだろうなとは思っていたけど・・・
想像してたのとちょっと違ったな・・・。

「それより、もう1つのほうは?」

「もう一つのほうって?」

「はい、みんなが神様を見ている隙に、車に羽衣を結びつけておきました!」

「ほおう、ちゃんと考えてるんだな」

「当然だ、抜かりはない」

「しかし、その羽衣はすごいな、どんなかたちにもなるのか?」

「羽衣の伸びる範囲ですけどね」

「これをたどればあの娘の家ですね」

「現実リアルは家突き止めるのも大変だな。

女の子の居場所にはアイコンがつくだろフツーは」

「・・・何のフツーだ?」

「お、あれじゃないか?」

目の前には結構おおきな屋敷が建っていた。

「わー大きなお屋敷! さすがお金持ちですよー!」

「ふうん、三〇院邸ほどではないな」

「何ですかそれ」

だが、桂馬は何かに気づき言った。

「・・・おい、違うぞ。羽衣は続いている。この家じゃない」

「あつたあの車だ。屋敷の角に止まってる」

「やっぱりここが家なのでしょうか」

「なんであんなところに車を止めるんだ？」

・・・あ！

「美生だ」

「なにかあのアパートに用なのかな？」

「ボロアパート潰してマンションでも建てるのか？」

「いや、さすがにそれは・・・」

ん？ あのポストの表札・・・、青山って書いてあるけど・・・。

美生はその扉を開け、こう言った。

「ただいま」

5 ベイビー・アー・ユー・ア・リッチ・ガール・・・？（後書き）

耕也「えー、ある所からの感想ですがあー、

何か俺だけ人との絡みが少ないそうでえーす」

作者「そうスネるなって。 今後はもっと増やすからさ」

耕也「ところで、この小説ってエロシー的なヤツはないの？」

作者「そーゆーのは人気が出てからするもんだ」

耕也「今、さらっとグチったよね!？」

6 ドライブ・ユア・カー・・・？（前書き）

耕也 「いいのか？　こんなにハイペースで更新して」

作者 「いいんだよ。　早くできたんだから」

耕也 「とっといたりしといたほうがいいと思うがなあ」

作者 「あー、お気に入り登録数　増えないかなあ・・・」

6 ドライヴ・ユア・カー・・・？

「引き続き、美生の家の前で張っている俺たち」

「うーむ、あいつは本当にここに住んでいるのだろうか？」

「さあな」

すると中から争う声が・・・、

「お嬢様、私はもうついていきません！」

もう金持ちのふりはおやめください！」

「私は青山中央産業社長の娘よ！ この生き方は変えられないわ！
パパがいつも言ってたわよ、青山家の誇りを忘れちゃいけない
て！」

「そのお父様も亡くなり1年、青山中央産業も人の手に渡りました・
・。」

お母様が働いて何とか暮らせている状況です！

お嬢様はもう社長の娘ではないのですよ！」

・・・父親が、いないのかアイツは・・・。

美生の執事らしき人物は、大量のオムそばパンを指差した。

「なのに今日もこんなにパンを買って、どーするんですかコレは！」

「仕方ないでしょう、一万円しか持ってなかったんだから」

「いい加減、小銭の存在を認めましょう・・・！」

私も社長の運転手をさせて頂いた義理でお世話してましたが・・・、
もう限界だ！」

「コラ、どこ行くの森田・・・！」

執事らしき人物が出てきた後、美生が後を追いかけて家から出てき

てしまった。

「待・・・」

「・・・」

・・・鉢合わせしてしまったという。

ちなみに俺はバレないように塀の後ろに隠れた。

おもしろいな、これ。

「お、お前はさっきの告白庶民!? な、なんで!?

ど、どうしてここを・・・!?

おーおー、告白庶民だって。

面白い名前だな。

メモしとくか・・・。

「あ、あの、この家は・・・あの・・・」

・・・さて次にどのような一言がくるのだろうか。

「ま、また告白しにきたの!? しよ、庶民の分を弁わきまえなさい!」
ボタン!

うおおお、あくまで金持ちの面目を保とうとしている!

美生が家に入ると、エルシイがゴミ箱の中から出てきた。

「美生様、本当に貧乏だったんですね」

「意外な人の一面ってヤツだな」

「・・・お前らだけで逃げやがって」

「で、覗き見してたと思われてたか?」

「100%イエス」

じゃあ確定だ。　コレはまた悪印象だな。

「だが、これは大きな前進だ」

「はあ？　でも覗いてたって思われて・・・」

「いい言葉を教えてやる」

「無視かオイ。無視なのか。そしてまたしても川柳なのか」

遠すぎる

二人を秘密が

ピッタンコーーーーーー・・・

けいま

「・・・何かア○○スの少女の幻影が見えた気がする・・・」

「大丈夫か？」

ひとまず桂馬は説明を始めた。

「美生がビンボーだったのは舞校の誰も知らない。

つまり、ボクと彼女だけが知る真実だ」

「そうそう、俺とエルシィは隠れてたからな」

「うう、つい反射的に・・・」

「こういう反射なんだ・・・？」

桂馬は構わず説明を続ける。

「二人だけの秘密の共有、コレは強力な『絆』になる！」

「盗み聞きで聞いた秘密でもか？」

「悪印象と好印象は変換可能だと前にも言っただろ」

・・・。。。。。。。。。

「ゲームの話だろ？」

「ボクが現実リアルの話をしたことがあったか？」

・・・ないですね。　はい、なかったわ。

「人間、決戦の場にあえて慣れない武器を持つべきだろうか？
決めたぞ、ボクは今後もゲーム理論を信じて戦う。」

いかなる現実リアルにも！」

「うー！ サムライです、神様！」

「アホらし・・・勝手にしろや」

「で、次の日」

さて、今回は桂馬やエルシイとは別行動だ。
ま、たまには悪くねーだろ。

すると、後ろから声をかけられた。

「お、耕也じゃなか。なんか久しぶりだな」

「何だ白川かよ。 チッ」

「何だ今のチツてのは！？」

「別に、お前は平凡だってことだ」

「ふうん、ま、いいけど」

いいのか。俺なんかゲーマーや悪魔と生活してるからな・・・。

「そうそう、この本知ってるか？」

悪魔が存在したらどーなる？ ってヤツ」

「たぶん、バカで溢れかえると思うわ」

「別に聞いているわけじゃあないのだが・・・。

てか何でそう思うんだよ？」

「長年のカンだ」

「いや、まだそんなに生きてないだろ」

何いってるんだ。

17年といたらたいそうな数だよ。

あと約83年しか生きられないんだから。

「・・・ん？ お前、何聞いてるんだ？」

「何を言ってるんだね君。 コレはかのんちゃんの新曲の

『All 4 You』だよ」

「オールフォーユー？」

「そんなのも知らないのか。 これだから耕也は」

いや、別にしらなくても構いませんよ。 ハイ。

「アア、せっかく、かのんちゃんの衝撃事実をおしえてやろうつてのに」

「いや、別にいいよ。 どーせたいしたニュースじゃねえだろ」

「フツ、ソレはどうか・・・？」

「？」

くで、学校く

「ん？ 耕也、アレなんだ？」

「あん？」

白川が指差した先にいたのは、

「な、何やってんだ桂馬のヤツ」

自転車の後部座席に美生を乗せ、必死に自転車をこいでいる桂馬だった。

「ご苦労」

「・・・帰りも・・・ハア、お迎えに・・・ハア、あがり・・・ます・・・」

「・・・」

「・・・だ、大丈夫か桂馬？」

「・・・大丈夫に見えるか・・・？」

「・・・見えません」

無茶するなあ、コイツ。

でもこの分なら攻略も早めに終わりそうだな。

「さらに次の日」

俺が学校に通っていると、女子が何人かで話していた。

「ねー、知ってるー？ 青山さん、運転手替えたのよ」

「誰だと思う？」

「えー、桂木！？ あのオタメガ？」

「しかも自転車！」

・・・

何か、有名になっておられるよ。

落とし神さん・・・

で、教室につく。

「桂馬のことでいろいろ有名だな」

「は？ 桂馬って誰よ？」

白川が聞いてきた。

「あ、お前桂木の名前知らないのか」

「桂木い？ ああ、オタメガか。別にアイツの名前なんざ興味ねーや」

やっぱり悪い方向で有名みたいッスよ、落とし神さん・・・

「なあお前、桂木と仲いいのか？」

「え？ まあ、そうだな」

「アイツはやめとけて。悪いウワサしかねえから」

「そんなにヒドイヤツには見えないけどな・・・」

「表向きだけだ、そういうのは」

・・・何故かこのとき、少しムカついた。

桂馬のことを何も知らないクセに悪く言うのは良くない。そう思ったのだ。

俺だって、桂馬と話し出したのは興味本意だった。
だが、ある出来事を通して仲良くなったのだ。

「さらにさらに次の日」

「もう体力の限界・もう駆け魂なんてどうでもいい・」

「いいのか？ 命がかかってるってのに」

「お前らは見てるだけでいいよなー。 あーゲームはやっぱ最高だ
ー」。

BGMあるし、街中歩いても疲れないし・・・・」
心が完全に折れているー！

そのとき、吹っ切れたようにエルシイが言った。

「私も駆け魂狩りが任務だからやってるんです！

私だって神様にあんな娘、追いかけて欲しくないです！」

「？」

「あの娘はいけない娘です。 貧乏なのに、お金持ちのフリを続けるなんて

無意味な見栄ですよ！」

確かに、一里あるぞそれは。

「社長令嬢を誇ってるわりには、社長だったお父様にお線香一つ上げるところ見たこと

ありません！ 死者には敬意を払うべきですよ」

「誇ってたからこそじゃないのか・？」

「・・・え？」

「誇ってたからこそ、死んだことを受け入れたくないんじゃないのかな。

だからあんな風に見栄を張って・・・」

俺はとりあえず思ったことを言った。

エルシイもこれを聞いて少し考えているようだ。

俺がこう思ったのは自分も親がいなかったかもしれない。ただとそれだけじゃない気もする・・・。

「・・・だが、どうやらアイツはいいやつということらしいぞ」

「「え？」」

「というかボクの手持ちの予想ルートがその結論しかない」

どういうことだろ・・・・・・ん？

俺はポストに何かが入っているのを発見した。

「桂馬、コレ何だろな？」

「・・・ん？」

桂馬はポストの中に入っていた手紙を開けた。

「お、おい、勝手に開けていいのか？」

中身は・・・パーティの招待状？

これを見た桂馬は・・・

「・・・耕也、エルシイ、

エンディングが、見えたぞ・・・！」

6 ドライヴ・ユア・カー・・・？（後書き）

作者「さあ、次回は美生編 完結だ！」

耕也「やっとか、もう2期は始まってるんだぜ？」

作者「気にするな」

7 パーティーはそのままで・・・（前書き）

作者「よっしゃー！ ついにお気に入り登録数が2ケタにいったぜ！」

耕也「2ケタつつつても10件じゃねえかよ」

作者「これを記念して何かしたいと思います！」

耕也「何かって何？」

作者「近々、活動報告で公開予定だ。」

活動報告はお気に入りユーザ登録するととどくぞ！」

耕也「今、この場で言えや・・・」

7 パーティーはそのままで・・・

「さらにさらに次の日」

俺たちはあるパーティ会場（裏庭）にいた。

「さて、今回の攻略も上手くいくのかね」

「上手くいかないと困ります」

突っ込まれてしまった。

俺たちは草陰に隠れているのだが、

桂馬はどこへ行ったんだ？

で、なんやかんや美生が叫んでいた。

「桂木はどこー！？」

ここは桂馬が例の自転車で連れてきた場所だ。

「桂馬はどこ行ったんだ？」

「さあ・・・？」

「ウチに来る招待状は全部無視してんのよ！

どーしてあいつが持つてるの！？」

「美生様、用意したドレスはいかがですか」

桂馬が現れた。

それはそうとどっから来た？ あいつ・・・。

「誰がパーティに連れて来いって言ったのよ！」

「いつも古アパートでは息が詰まるでしょう。」

たまには、本当の金持ちのイベントも必要と思ひまして」

「そもそもここはパーティ会場じゃない！ 会場はあっち！」

美生は大きな建物を指差して言った。

「いやー、ボク踊りとか自信ないので
前もってお嬢様に教えてもらおうかと・・・」

「踊り？ お前参加する気？」

いいわ、お前、ここで一人でパーティーやりなさいよ。

客もボーイもシェフもないけどね」

このとき、俺は隣にいた悪魔がいなくなっていたことに気づかなかった。

「メイドはいるみたいですよ」

なんとビックリ。メイド姿のエルシイが
お飲み物いかがですかーと言いながら、あの場に行っていた。
これも桂馬の作戦なのか。

・・・ん？ 何か争ってるぞ。

あ、言いくるめられて美生が動いた。

で、エルシイが戻ってきた。

「桂馬、何だって？」

「今夜が勝負だそうです。 駆け魂を絶対に逃がすなと・・・」

「へー」

俺とエルシイがそんな会話をしているとき、
タキシードを着た3人の男性が美生のところへやってきた。

何か言っているらしいが・・・聞こえん・・・。

「おい、どーにかして聞こえないか？」

「えーと・・・み・・・」

「耳を澄ます以外でな」

「うう・・・。 こうなったらこんじょーです、こんじょー！」

「根性でどーやって聞くんだよ。」

あ、あの3人組がどっか行ったぞ」

静かになったせいか、二人の会話が聞こえるようになった。
が、途中からなので理解しがたい・・・。

「・・・もうやめませんか？　こんな世界にいてどーなるんです？」

「・・・うるさい！　私は本当に金持ちよ、金持ちなのよ！」

お前だって手伝うって言ったくせに！」

「もう十分ですよ。」

・・・お父様も・・・もう満足されてますよ・・・」

「・・・」

・・・。。。

「死んだお父さんを忘れない為に、お父さんの教えを守ってたんだよね。」

だから社長令嬢を演じ続け、お父さんの仏壇へお線香もあげなかった」

な、何か推理小説で犯人を追いつめてるところみたいだ・・・。

「でも・・・、君はもう自分ひとりの人生を歩むべきだ！」

・・・。。。。。。。。。

「パパは死なない・・・、パパは私のココロで生きてる！」

私がパパの教えを守ってる限り！」

「でも昨日、君は笑ってた！」

え？

「そんなことあったのか？」

「は、はい。　えーっと、説明しづらいんですけど・・・」

詳しくはコミックス2巻か、アニメ第1期 FRAG3. 0をどうぞ。

「いつも笑わない君が、昨日は特別楽しいことがあったのかい？
昨日の笑顔を、もっと見たいんだ！」

「・・・・・・・・」

言ってて恥ずかしくないのかアイツは。

ボコッ！

あ、顔を殴られた。

「うおお！」

「お、お前はペテン師だ！ 私に協力するふりしてだましてたのね！
お前が来てから・・・、パパがどんどん小さくなっちゃおう・・・」

」

「このままじゃ・・・パパが・・・本当に死んじゃう・・・」

「それでも！ ボクは君の心に住みたい！」

ボクが嫌ならパーティに参加すればいい！ どっちを選ぶんだ！

どっちなんだ！？」

・・・そして、

ボシユウウツツ！

「あ、出たぞ」

「りょーかいっ！」

ズボボボ・・・ボムッ・・・！

こうして、エルシィは2匹目の駆け魂も無事、勾留こうりゅうした。

「で、そのまた次の日」

「神様のおかげでもう2匹ー!」

「ボクは早くもギリギリだよ・・・」

「よくがんばったな、うむうむ」

「同情するならゲームをくれ・・・」

値段によっちゃ金のほうがいいかな、俺は。

「ちょっとそこの庶民」

元・大金持ちの青山美生が声をかけてきた。

「昼ご飯にオムそばパンを買いだいたいんだけど、このコインで足りるのか教えて。」

使ったことないから、どれがどれだかわからないのよ」

そういつて美生は216円を取り出した。

「2コは買えそうだぞ」

「そう、ありがと」

・・・。

「小銭を認めてるぞ、アイツ」

「性格はあんま変わってないな」

「美生の記憶がなくなって残念だな。」

結構かわいい娘だったからなあ?」

「別に・・・。ボクもお父さんも忘れたほうがいい。」

これで自分自身の人生を歩けるだろ」

「そうそう、次は私にも華やかな役くださいよ!」

「俺にもなんかやらせてくれよ」

「・・・お前らのキャラじゃ、スペック不足だな」

「何い!？」

7 パーティーはそのままで・・・（後書き）

耕也「・・・やっと美生編が終わったか」

作者「こっちだっていろいろ大変なんだよ」

耕也「ところで、さっき言ってた何かって何だ？」

作者「自分で確かめな」

耕也「えー、なら本編でエロシーンを入れろよ」

作者「前にも言ったが、ああいうのは人気がでてからやるもんだ」

耕也「ケチ！」

作者「活動報告、見てね！」

8 今ここにある聖戦・・・（前書き）

耕也 「お気に入り登録数が少しずつ増えてってるな」

作者 「コメントをくださった方々、ありがとうございます」

耕也 「ところで、俺って何か特技とかあるの？」

作者 「・・・さあ、では本編をどうぞ！」

耕也 「スルー!？」

8 今ここにある聖戦・・・

〽とある日の桂木家〽

「オイ、桂馬。 食事中くらいゲームやめろよ」
「・・・・・・・・」

「桂馬、ちゃんと前向いて歩きなさい」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「じゃあエルちゃん、桂馬のことよろしくね」
「はいっ、任せてください！ いってきまぁーす！」
「行ってきます」

俺もちゃんと挨拶をし、桂馬の後を追った。

「うーん・・・、桂馬ってあそこまでゲーマーだったか？」
「食事中くらいは、してなかったような・・・」
「これは調べる必要があるな・・・」

〽で、休み時間〽

桂馬は机の上でうなだれていた。

「ごめん・・・ごめんよ・・・」
「神にーさま、どうしたんですか？ 元氣ありませんよー？」
「君はまだボクを神と呼んでくれるのかい？ こんな無力なボクを・
・・」
「おーい、大丈夫かー桂馬ー？」

「ムリだ、どうしても攻略できない！

ウワサどおりだ・・・」

なんだ、またゲームか・・・。

「桂馬が攻略できないなんて、よっぽど難しいゲームなんだな」

「・・・、そんなことはこのゲームを見てから言っても
らおうか！」

了解しましたー。

「これがメインヒロインの飛鳥空だ」

「ふうん、絵を描く女の子か」

まあ、ゲームのヒロインとしてはいいんだろうけど。

「で、コイツがどうかしたのか」

「うむ、彼女が描いた絵を見る場面だ」

ゲーム画面ではヒロインが「私の絵、見てくれる？」と聞いている。

「ここは当然「はい」だろ」

ピコ・・・

『私の絵、見てくれる？』

・・・アレ？

「ま、また同じ質問が・・・」

「今度は「いいえ」を選ぶぞ」

ピコ・・・

『私の絵、見てくれる？』

またこの場面かよ！

ピコ・・・

ピコ・・・

ピコ・・・

「何だコレ、さっきから進まないぞ！」

・・・コイツは耳が悪いということにしておこう・・・
だが桂馬はそうはいかなかった。

「バグでループしとる!!！」

「るーぷ？」

「本来なら次の場面に進むはずが、プログラムミスで
同じ場面に戻ってきてるんだ・・・」

「ふーん、バグか・・・」

「思えばこのゲーム、買うときから不吉なアロマが漂っていた・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

で、突然桂馬は叫びだした。

「なーにが「せつ☆泣き」だ！」

23回も発売延期しやがって！

グッズ作ってるヒマがあったらデバッグしろ！

PFP初の二枚組み!?

2枚目は修正ファイルだろアホーーーーーっ！」

おー、怒ってんなぁー。

「とどめにこのバグの山・・・誰もがこのゲームを見放した・・・」

それでもボクには解けると思っていた・・・でもバグが相手じゃ・・・

」

落ち込んでんなぁ。

・・・よし、ここは友人として慰めてやるか！

「まあゲームが壊れてるんなら仕方ねえよ。

いくら桂馬でも「ムリ」なものは「ムリ」だよな」

このムリという言葉に反応したのか・・・。

「・・・誰がムリなんて言った・・・？」
「・・・アレ？」

「どんなゲームも攻略できる・・・だから神なんだ・・・」
「え？ 桂馬くん・・・？ ・・・あ、そういえば宿題があったなあ
！・・・」

「手伝え！」

「ぎゃあああああ！ 放せええええ！ 俺をどこへ誘拐する気だあ
ああああ！」

「・・・地球にはこんな言葉がある。
・・・火に油を注ぐ・・・。」

そして俺たちは屋上にいた。

「いいか耕也、ボクが選んだ選択肢を全部メモしろ！」
「メモ？」

「ループの原因が直前の選択肢にあるとは限らない。
もしかしたらそれ以前の選択で違うルートに入れば、
条件が変わってループを回避できるかもしれない」

「なるほど・・・」
要するにガンバレってことだな。

「よし、ゲーム開始だ！」
ピコッ

桂馬はPFPの電源を入れた。
・・・はずだったが・・・。

「・・・始まらないぞ・・・？」
「このゲーム・・・、3回に2回は起動しないんだ・・・」
とんだクソゲーだな！

ピコッ

お、今度はちゃんと起動したみたいだ。

『私、お昼ごはん食べるの』

選択肢は、「学食に行く」と「ほっとく」だな。

「このゲームの最初の選択肢だ。さっきは行かなかったから今回は「行く」だ」

「なるほど」

「選択肢総当りなんてボクの主義じゃないが、

全部のルートを当たればきっと道は開ける！」

『あなたは何を食べるの？』

選択肢が出てきて、俺たちはア然とした・・・。

カレーライス、親子丼、カツ丼、焼肉定食、コロッケ定食、シヤケ定食、たぬきうどん・・・

その他いろいろ・・・。

「・・・こ、コレも全部選んでいくのか・・・？」

「・・・と、とと、当然だ・・・！」

桂馬は落ち着き、再び話し始めた。

「どの選択肢がルートの運命を握っているかわからん。

じゃんけんの勝敗がフラグの時もある。

すべての選択肢の組み合わせを調べる」

どれだけ時間がかかるんだろうか・・・・・・。

すると桂馬が、妙に爽やかな声を出して言った。

「ちなみにこのゲーム、セーブできないから★」

「・・・へ？」

「セーブするとPFPが壊れるんだ」

どこまでクソゲーだ！！！！

「だから失敗したらいちいち初めからやり直しね★」

いやいや、爽やかに言ってもフォローになってないし！

しかもこれは相当時間がかかるだろ・・・。
もしかして俺たちは、とてつもなく無謀な挑戦を・・・？

ダッ！

危険を察知した俺は逃げた。

光の速さで！

もしくはそれに少し劣るくらいの速さで！

だが、読まれていたのかすぐに捕まってしまった。

そして桂馬は脅迫ぎみに・・・。

「今 お前が住んでいるのは誰の家だ？ ・・手伝ってくれるよね・
・・・？」

「・・・モ、モチロンジャナイカ。 ヤダナアケイマクンワ・・・」
くそお・・・こいつこそ真の悪魔だ・・・。

ゲームは、

「アレ、ヒロインが逆さに写ってる」

「こんなのはフツーだ」

時を消費する。

「・・・声が割れてるぞ・・・」

「作り手は演出と言っている！」

最強のスナイパー。

「誰だよこのおっさん・・・」

「仮キャラぐらい消しとけ！」

「その後」

「よし、学食↓オムライス↓好き↓教室↓Yes↓家↓Yesはループだ!」

「あああああ、疲れたああ・・・死ぬっう・・・」

「次、学食↓オムライス↓好き↓教室↓Yes↓家↓No!」

「桂馬あ・・・もうムリ・・・。限界だあ・・・! いくらやっても同じだって・・・」

「選択肢はまだ全部洗ってない。可能性はまだある」
まったくゲーム好きにもほどがあるぞ。

付き合わされるこっちの身にもなってみろ。
1個ぐらい攻略できなくてもいいだろが・・・。

「いつも現実（リアル）はクソゲーだって言ってるのに、
何で実際のクソゲーをやるんだ?」

「じゃあ、空の絵は誰が見てやるんだよ」
え?

「確かにこのゲームはクソゲーだ、でも空はなににも悪くない」
はあ・・・。

「悪いヒロインはいない、悪いゲームがあるだけだ!」
ふうん、なるほどな・・・。

「ヒロインはいつもゲームの中で助けを求めているんだ。
ゲームが壊れてるからって見捨てられるかー!」
・・・いや、桂馬が壊れているのか・・・?

「ていうか、そこまでしなくてもこのゲームを作った会社に文句を
言いに行けば・・・」

「・・・その会社、潰れたよ・・・」

「!」

「空をループに閉じ込めたヤツらは消えた。」

そしてプレイするヤツは誰もいない・・・。

もうボクだけだ・・・、ボクは必ず・・・この娘^こを救ってやる!」

そして例のシーン・・・。

『私の絵、見てくれる?』

そして桂馬は「はい」を選択する・・・。

・・・ピコッ・・・。

『ありがとう!』

「・・・抜けた・・・抜けたぞ! ループを抜けた!」

「すげえ、まさか本当にやってしまうとはな・・・」

なるほど・・・、ちよつと・・・いや、すげえ変だけど

・・・駆け魂を捕まえられるのは、こういうヤツだからなのかもしれない・・・。

「フフ、見えたぞ・

エンディングが見えた！」

ピコッ

『jコ不善y k u麻くh d z k うk v不
秦弟トン課h g不下うd ん鵜g xでお・・・・・』

「！」

「！！！！！」

・・・・も・・文字化け・・・。

散々だ・・散々やったあげくコレか・・・。

「フフ・・これくらいで終わると思っただけだったよ・・・。
でもどんなバグが待っているも負けはしない・・・」
・・え・・まさか・・。

「やるぞー！ー！」

「えええええつ、いい加減に帰してくれよ桂馬ー！」

「ゲームは一日、100時間！」

「意味のわかんねえことを口走ってんじゃねえー！ー！ーっ！」

ゝその後・・・ゝ

とあるネットで、あのゲームのページに、こんな記事を発見した・・

。

『ただ一人、エンディングを見たものがあるという
ウワサがされたがやがて忘れられた。』

それはまさに、神のみぞ知ることだ・・・。

8 今ここにある聖戦・・・（後書き）

作者「では、次回は神のみ本編から少し離れて、
耕也について書きたいと思います」

耕也「キターーーーーーーーーーーー！」

作者「かのん攻略はその次の話にでも」

耕也「なんなら、これからずっと俺でも・・・」

作者「却下」

耕也「・・・チッ」

9 とある学校の転校生・・・（前書き）

耕也 「やったぜ！ ついに主役だ！」

作者 「主役以前に主人公だけどな」

耕也 「俺の時代がキタ！」

作者 「アホがいる・・・」

9 とある学校の転校生・・・

あのゲームの攻略から2日後・・・
俺は普通に学校に登校していた。
桂馬たちとは別行動で。

「桂馬たちがいないだけでこんなにヒマなんだなあ・・・」
と、しみじみ感じる俺であった。

完。

・・・完。じゃねえよ！
いや、終わらねえよ！？

せつかく1話分だけ出番をもらったんだからな！
とかいろいろ考えながら歩いていると・・・

「・・・」

「ん？」

1人の少女が目に入った。
舞校の制服を着ているが・・・、あんな娘こは見ることがない。
1年生か3年生かな・・・。
1人でウロウロしていたので話しかけてみることにした。
もちろん3年生だった時のために、敬語で。

「あの・・・、どうしました・・・か？」

「え・・・？ いえ・・・舞島学園高校学院高等学校への行き方がわからなくて・・・」

「ウチの学校はそんな複雑な名前じゃねえっ！」

「！」

「・・・ハッ、しまった。」

つい桂馬に突っ込むように突っ込んでしまった・・・。

気になったので彼女の顔を覗いたのだが、

「・・・」

何も動じてなかった・・・。

「あの・・・、舞島学園高校学院高等学校の生徒さんですか？」

「ひとまず、そのコ〇ミから怒られそうな名前で呼ぶな」

「ハイ、では舞島学園高校への行き方を教えてくれませんか？」

名前知ってたんなら最初からそう呼べや！

まあ、ほっとくのもかわいそうなので一緒に行ってあげることにした。

舞校についた。

「ホラ、ここだよ」

「・・・思ったより普通・・・」

悪かったね。

「耕也じゃないか」

「何だ白川か、チッ」

「何で俺に会うたびに舌打ちをするんだ！？」

理由は明確だ。

何回か登場しているが、コイツは友達の白川だ。

と、白川は俺の隣にいる少女に気づいたのか・・・。

「耕也、その娘は誰だ？」

「ああ、この娘は・・・。」

・・・あれ？　　そういえばまだ名前を聞いてなかったな・・・。

「君、名前は？」

「えっと、真紀。あまみやまき 雨宮真紀」

「へえ、俺は竹内耕也。よろしく」

いつのまにか、敬語は使っていないかった。

（教室）

「神様、今日こそはお弁当残さず食べてくださいよ！」

「誰がお前の弁当など食うかあ！」

「落ち着け桂馬」

「そういえば、お前今日は一緒に行かなかったな。

何かあったのか？」

「いや、たまには1人で行ってみたいただけだ。

あ、そういや今日妙な子に・・・」

俺が話そうとしたとき、担任の二階堂が入ってきた。

「みんな席に着け」

二階堂は桂馬を見てため息をつく、再び話し始めた。

「えー、今日はみんなに話がある」

え？　まさか、桂馬が退学とか・・・？

・・・んなわけないか。

二階堂たちは桂馬のことは諦めているらしいしな。

「実は、新たに転校生がやって来た」

ザワザワ・・・、全員（桂馬を除く）が隣の人間と話し始める。

「静かに。 入れ」

・・・俺も驚いた。

入ってきたのはさっきの少女だったのだ・・・。

「名前を」

「雨宮真紀です・・・、よろしくお願いします」

「・・・じゃあ、席は・・・桂木と竹内の間にでも行っとけ」
適当すぎだろ、アンタ。

席に着いた彼女は、俺に気づいたのか。

「あ、さっきの・・・」

「ああ、よろしく」

「うん」

笑顔がとてもかわいい娘だった。

だが、まさかこの娘に駆け魂が入っていようとは・・・
まさか俺がこの娘の駆け魂を出すことになるとは・・・
このときは知る由もなかった・・・。

だが、この攻略はいずれ描かれるだろう。

しかし、それは今ではない。

9 とある学校の転校生・・・（後書き）

耕也「短っ！ 本編に比べて短っ！」

作者「仕方ないだろ、後がつかえてんの」

耕也「ところで、俺が攻略するとか言ってたけど・・・」

作者「それが描かれるのはまだ後だ」

耕也「・・・なるほど」

作者「まあ、いつかは必ず描くから、よろしく」

耕也「いつなんだろうな・・・」

10 IDOL BOMBER! (前書き)

耕也「いやー、ついに10話目まで来たか。

これじゃ、すぐに2期に追いついちまうな」

作者「いや、それはない」

耕也「え? どういうことだ?」

作者「それは・・・また今度お話しよう」

10 IDOL BOMBER!

く桂馬宅く

『それでは発表します！』

今年のNNS音楽賞最優秀新人賞は・・・！』

『中川かのんさんです！』

発表された途端エルシイが叫びだした。

「うーうーうーっ！ かのんちゃんーうーっ！」

騒がしいヤツだ。

このアイドルのファンなのか？

ずいぶんとまあ小市民な悪魔だな。

「うー、かわいいなあー。

神にーさま、耕也さん、見てくださいよー」

「お前、テレビっ子だな」

確かに。

「エルちゃんのそのリボン、もしかしてかのんちゃんのマネ？」

「あっハイ、私もアイドルさん気分を味わいたくてー」

すると、桂馬が反論するように・・・

「フン、アイドルとかテレビとか、もはや前時代の遺物だよ」

また何か言い出したぞ。

「今世紀は、ゲームアイドルの時代だ！」

え？ あれ？ 何か背景が変わってるぞ・・・？

「い、異議ありーっ！」

エルシイが叫んだ。

「あんなかわいい娘こが現実じにいるんですよ！

現実じにいないかわいい娘こより上です！」

「ま、そりゃそうだ」

で、桂馬の反論。

「フ、逆に現実リアルであることがリアルアイドルの限界なんだよ」

「桂馬よ、お前の発言はいつもすごいな」

「アイドルとは何か！？ それは永遠の夢の体現！」

現実リアルのアイドルはどくくしても劣化するんだよ。

年をとるし、しわもできるし、タバコ吸ったり、不祥事で引退したり

したらしたで年取って聞きたくもないバクロ話したり・・・」

「うう・・・」

エルシイが押されている！ 恐るべし落とし神！

「しかし、ゲームの中のアイドルは違う！」

現実リアルのアイドルが3Dであることにあぐらをかいてる間に、
ぶんしんじょうぼ
分進秒歩の進歩をとげるゲーム女子！

劣化をしない高スペックはまさに次世代！

その間に現実リアルのアイドルは何か進歩したか？

何も変わっていない！」

ここまで熱弁されるとちよつと引くわ・・・。

見ろ、エルシイもちょっと困った顔してるぞ。

「現実リアルのアイドルなど今や沈みゆく船！」

新しい時代には新しい船に乗らなくては！」

どこからか拡声器をとりだした桂馬は

「船が出るよー！ー、新世界行きの船がー！ー！」

「わ、私も乗せてくださいー！ー！ー！」

だから何なんだこのミニコントは。

すると桂馬のお母さんが箸をベキツと・・・

ええええええええ、箸折ったよあの人！

「行儀よく、食べなっ！」

アンタはどーなんだっっっ！

その後、3人は静かに夕食を食べていたという。

くで、次の日く

授業が終わり、俺は桂馬と屋上にいた。

「いいのか、エルシイを放っておいて」

「またいつ駆け魂を追い回させられるか分からないからな、
できるだけ本数やっておかないと」

やはりゲームが目的ですかっ。

「南校舎コウは穴場だし、エルシイも分かんないだろ。

言っとくがエルシイにこの場所のことは言うなよ」

「へいへい」

俺たちがそんな会話をしていると、鼻歌を歌いながら1人の少女が

やってきた。

・・・ん？

この鼻歌、どこかで聞いたことあるな・・・。
それにあの娘こも何かで見たことあるような・・・。

立ち止まった少女は、突然独り言を始めた。

「最優秀新人賞か・・・私、がんばったな、がんばったな・・・。

今のアイドルって派手で元気な子ばかりなのに、私みたいに
地味で古臭いのでよかったのかな・・・」

・・・あ！

そうだ、何かで見たことあるとおもったら
昨日テレビにでてた子だ！

名前は忘れたが・・・。

あの歌も聴いたことあるとおもったら、
前に白川が聞いてた曲だったんだな。

何て曲だっけ、えっと・・・。

俺が考えていると、名も知らぬ少女がこちらへ来て、

桂馬に話しかけた。

「こんにちは、この場所知ってるなんて、君ツウだねっ！」

元気に話しかけてきた。

だが、桂馬はゲーム中。

返事なんてするわけが・・・

「・・・誰だお前？」

ぬおおおおおおおっ！

初めて俺に言った言葉をアイドルに向かって言ってんじゃねえっ！
これなら無視のほうがまだ感じいいわ！

「ボクは忙しい。話しかけるな」

トドメ指しやがったー！ー！ー！

忙しいって、ゲームしてるだけじゃねーか！

さぞ傷ついたであろうアイドルの方を見ると、
開き直ったように、

「あ、あはは、そうだね。私を知らない人もそりゃいるよね・・
」

立ち直ったのか・・・。

・・と思った瞬間。

ドンっ！

え？

「ギャアアア！」

ビリリ・・・

桂馬が吹っ飛んでった・・。

・・てかコイツ、スタンガン持ってるぞ！！

死ぬって、ヤバイって！

※黒焦げになります及安全なスタンガンを使用しております。

「ど、どうして知らないの・・私・・アイドルなんてウソだウソだ
ウソだ・・」

「あのお・・・サ、サインください！」

「ボクのPFPーッ！」

ゲーム機だしてサインっておかしいだろ。

「サイン書きます、書かせて！」

お前も、書くんかい！

「わー、宝物にします！」

「ボクのPFPーッ！」

桂馬はPFPを取り返し、画面を拭き始めた。

まあ、画面に落書きがあつたら何もできんからな。
たとえクソゲーでも。

「すごいですー！こんな有名人が同じ学校にいたなんてー！」

「有名だなんてそんな、まだまだだよ・・・」

私はみんなに・・・みんなの心に、私の歌を響かせたいの」

「もう響いてますよーっ！」

さっきから興奮しすぎだろコイツは。

桂馬を見てみろ、まだ画面を拭いてるんだぞ。

エルシィは桂馬の方に振り向き、

「なのにごーして教えてくれなかったんですかー！」

同じクラスだっていうのに！」

この言葉にかのんが反応した。

「言ったら、ボクはリアルアイドルみたいな
前時代の遺物には興味がないって」

「お、おい、桂馬・・・逃げた方が・・・」

「ん？」

「オ、・・・オナジクラス・・・？ その人、同じクラスだったの・・・」

？」

あーあ・・・スイッチ押しちゃった。
そして例のごとく・・・

バリバリバリバリ！

「うぎいいいいいい！」

スタンガンだ。

いつか死ぬな、コイツ。

※くどいようですが、安全なスタンガンです。
と、そのとき・・・。

ドロドロドロドロドロ・・・

「え！？」

駆け魂！？

バチ・・・バチ・・・

「同じクラスの人にも知られてないなんて・・・

私なんかアイドルじゃナイ・・・ゴミヨ、ゴミゴミ・・・」

怖い！ この人怖い！

「不安ニサセナイデ・・・不安ニサセナイデ・・・」

いつの間にかスタンガンが2個になっている！
さすがに桂馬も身の危険を感じたのだろうか。

「わーーーーー！ 2個はマズイぞ、2個はああつ！

セ、セーブ・・・セーブを・・・。

クソッ、画面が見づらいッ！」

やっぱりゲームのことしか考えてないんだね！

・そして、ツカツカと迫ったかのんは桂馬の前に立った。

「・・・あなた・・・名前は・・・」

「か、桂木・・・です・・・」

「・・・桂木君・・・」

・・・。

桂馬が名を名乗ると、かのんはショートしたように、その場を立ち去った。

「桂馬・・・大丈夫だったか？」

「ああ・・・、なんかバイヤツに絡まれたな。」

二度と会いませんよーに」

拝んでんじゃねえ、お前が事の発端なんだよ。

「お前がいきなり誰だお前とか言うから・・・」

俺が話し始めたとき、エルシィが桂馬に突っ込んできた。

「神様ー！　大変ー！ー！　」

ドオンッ！

「・・・お前にも会いたくないっ！」

「あ、あの娘こ・・・バレないように手で押さえてたんですけど・・・」

エルシィが駆け魂センサーから手を離す・・・。

ドロドロドロドロドロ・・・

「か、駆け魂！？」

「そーです、駆け魂です！」

かのんちゃん、次の標的^{ターゲット}です！」

桂馬の運命はつくづく悲惨なものだと、
このとき俺は悟ったよ・・・。

10 IDOL BOMBER! (後書き)

耕也「お気に入り登録数？」

作者「そう。それによってこれを打ち切ろうかなと」

耕也「いやいや、結構人気あるじゃねえか、この小説」

作者「打ち切るといっても、すぐに連載再開するから安心しな」

耕也「？」
なら最初から打ち切らなけりゃいいのに・・・」

11 UP TO GIRL・・。(前書き)

作者「さあて、今回の話では耕也の意外な
特技が明らかに！」

耕也「特技って・・・何かあったか・・？」

11 UP TO GIRL・・。

『・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・ 助けて』

・・ある日転向してきた少女、雨宮真紀・・、
その少女が夢に出てきてはつきりところだったのだ。
『助けて』と・・・。

くある日の舞島学園く
「・・・・・・・・」

今考えると、夢ではなかったのか
夢だったのかは定かではない。
だがはつきりと聞いたんだ。
それだけじゃない。

夢かは分らないが、その少女の後ろから
何か不気味なオーラが出てきていたような感じがした。
例えるなら・・そうだな・・まるで・・

『駆け魂のような感じ』だった。

「何を一人で唸っている。」

バカが悩んでたって何にもならんぞ」

「やかましい」

桂木桂馬が俺に話しかける。

慰めているのかは分からないが・・・。

そんなことを考えているとエルシィが次の攻略相手、

中川かのんの情報を読み上げ始めた。

「えーと、中川かのん 身長161? 体重45?、

3月3日生まれ16歳。 久々に登場した「せーとーはアイドル」

さん・・・」

「正統派か? スタンガンが」

読み上げたエルシィにすかさず、桂馬は言う。

どうやらかのんのせいでPFPのデータが飛んだことを

まだ根に持っているらしい。

で、俺は素朴な疑問をエルシィにぶつけてみた。

「毎度毎度、思うんだが。駆け魂持ちの子の情報は

どうやって手に入れているんだ?」

「企業秘密です」

何の? メツチャ気になるんだけど。

「でもまさかかのんちゃんが次の駆け魂の持ち主だったなんて・・・」

「こいつとは関わりたくない。 見なかったことにしよう」

おいおいおいおい!?

やっぱり根に持ってやがったよこの人!

「ボクは3D女は嫌いだ、だがもっと嫌いなものがあつた。

それはスタンガンを使う3D女だ!」

「・・・」

もうここまできるとなんか・・・

ケンカに負けたガキの負け惜しみにしか聞こえてこないぞ。

「もう顔も見たくないな」

「ダ、ダメですよ！ 忘れたんですか！？」

駆け魂狩りは私たちの命が掛かってるんですよ！」

「命もセーブデータあつての物種である」

今回ばかりはゲームに例えるなよ。

「駆け魂も変な女の中にばかり隠れやがって。

もうちよつと普通のやつにも隠れるよ！」

「そこ！？ そこにキレるの！？」

桂馬は席に着き、ゲームを始めようとする。

その時エルシィが俺に話しかけてきた。

「あの、ちよつといいですか」

「え？ 何だ？」

「この前転校してきた女の子、覚えてますか・・・？」

「え、ああ、おぼえてるよ」

夢にも出てきたしな・・・。

「たしか雨宮だっけ」

「その雨宮真紀さんが席に着いた時なんですけど・・・」

席？ 確か、俺と桂馬の間だったな。

ちなみにエルシィが俺の後ろだ。

「席に着いてどうなったんだ？」

「センサーが鳴った気がしたんです」

・・・え？

「センサーって・・・駆け魂の？」

「はい。でも、ホントに一瞬で・・・なった気がただけかもしれないけど・・・」

「・・・」

もしセンサーが反応を示していたとしたら、

あの子の中に駆け魂がいるということになる・・・。

・・・でも、

「でも、何で俺にそんなことを伝えたんだ？」

「室長に連絡してみたところ、耕也さんと真紀さんは

面識があったようなので」

そういえば俺、駆け魂隊の関係者になっちまってるんだよね・・・。
まあそのおかげで桂馬の家に居候できているわけだが。

「分かった、とりあえず頭の隅にでも入れておくよ」

「ありがとうございます」

俺に軽くお辞儀をしたエルシィは桂馬の説得に向かった。

・・・駆け魂。

あの子の中にいるのか・・・。

いた場合はやはり桂馬が出すのだろうか・・・。

「・・・ま、いいか」

俺は深くも考えずに桂馬たちのところへ向かった。

俺はこの時はまだ、自分が駆け魂を出すことになるうとは
考えてもいなかったからだ。

・・・この時、扉の影から赤い光が覗いていた気がするが、・・・気の
せいだろう・・・。

「・・・なんだコレ？」

俺が桂馬のところへ着くと、桂馬はCDらしきものを持っていた。

「桂馬、何だそれ」

「分らん。机の中に入ってた」

桂馬がCDの裏面を見ると、何か書いてあった。

『桂木くんへ

放課後昨日の場所に

来てください。おねがいます。

来てくれないトキはおしおきさせてもらいます・・・。

かのん

』

昨日の場所・・・屋上か。

ってかこれ怖っ！

脅迫メールだろこれ！

おしおきって絶対アレだ！

あの電気製品だ！

犯罪とかによく使われるヤツだ！

犯罪撲滅運動！！

〜というわけで放課後〜

屋上にはかのんが待っていた。

ちなみに俺とエルシィは毎度の如く

影に隠れて見ている。

「すみません、わざわざきていただいて・・・。
すぐに終わります
ので・・・」

脅迫してきたわりには腰の低い態度だなあ・・・。
つか、何でコートなんか羽織ってんだ・・・。

すると、かのんはバツとコートを脱ぎ去り、こう言い放った。

「聞いてください！ All 4 You！」

かのんは自分の曲を歌い始めた。

・・・な、何で？

校内全体に、かのんの歌が、流れた。

「しかし何で・・・」

「うおおおおおっ！かのんちゃっくんっ！」

「うおおおおおっ！白川！？」

何で毎回お前はいつの間にかいるんだよ！」

「黙ってる耕也！歌が聞こえん！」

あー、そーですかー。

「エルシィ、このバカ邪魔だからどっかやってて・・・」

「うわっっっ！かのんちゃんが歌ってるっっっ！」

お前もかよ！

「でも・・・何でわざわざ神様の為に・・・？

・・・ま、いいか」

「いや、いいんかよ！？そこ重要だと俺は思うな！」

「聞こえんから黙ってる耕也！」

何なんだお前は。

さて、一方桂馬は・・・。

「・・・・・・」

ピコ、ピコピコ・・・

・・Oh, it is cool!

「で、結局今日は何の用なんだ・・・？
歌、聞いとけばいいのか・・・？」

デイス イズ ア 禁句！

俺にはこんな音が聞こえたね。

「バチッ・・・」

出ました、スタンガン（ドラえもん風）。

桂馬に命の危険が迫る。

さてどうなるのか！

ピロリロリロ・・・

・・・この音は、携帯電話？

「あーっ、た、大変！」

「あ、明日もここで！ 必ず！絶対きてください！
こうしてかのんは去っていった・・・」

「・・・た、助かった・・・ボクのPFP・・・」

結局そっちなんすね桂木さん。

桂馬が生き延びたところで、エルシィが当然の意見を出した。

「神様！ どうしてあんな冷たい態度を取るんですか！

せっかくかのんちゃんの方から近づいてきてくれるのに！」
「そうだそうだ」

・・あれ？　なんかこういうときのセリフって
なんかエルシィの方が多い気がする・・。

「見極めろ、ここは乗ってはいけない流れだ」

WATCH OUT！

美味すぎる

イベントを

拾って食べたら

毒フラグ

けいま。

「お、今回は川柳じゃなかったな」

「ゲームじゃ恋愛は女の子を追いかけることに等しい」

「な、何でいつもそこで無視するのかな？」

「逆に向こうから追いかけてくるときはトラップの時がある。

特にアイドルは会にくい設定が多いのに、

向こうから会ってくるなんて、これはスルーが吉！」

そんなもんかね。

「ま、データも飛ばされたしな」

「そっちがメインの理由かよ」

く桂木宅く

『カキーン！

またいったあーっ！

入った！　満塁ホームラン！

引き離す！

』

「ん？お前がゲームなんて珍しいな」

「そうか？俺はまあまあするほうだと思うけど・・・」

「・・・野球ゲームか・・・」

「対戦してみるか？」

「フッ、神に挑むなどなんて愚かな・・・」

『カキーン！

打球はグングン伸びていく！

入るか！？

入った！ 3ランホームラン！

大声援が響き渡る！

「・・・くっ・・・」

』

『カキーン！

ズギューーーーン！

入った！ 3者連続ホームラン！

ここまできたらもう手がつけれません！』

「・・・な、なぜだ、神であるボクが、全く適わないだと・・・？」

「フッ、伊達にパ○ポ○やってないぜ！」

桂木桂馬6 — 18 竹内耕也

「パ○ポ○で俺に適うやつはいないな」

「くっ、もう一回だ！」

「おっしゃ！」

「・・・神様、攻略は・・・」

「次の日」

「初めて人前で歌います！ 新曲、ハッピークレセント！ 聞いて

ください!」

わはははは! 今日是非常に気分が良いぞ!
目覚めスツキリだ!

「神様・今日もスルーなんでしょうか・」
「まあ桂馬なりの考えがあるんだろうが・」
・かのんが歌を歌い終わった。

「どうでした!？」

それに対する桂馬の反応は?

「・・・ぐううう・・・」

ね、寝てる・・・? いや、寝たフリか・・・?
・な、なんかかのんの様子がおかしいぞ・・・。

「ダメダ・・・ワタシナシテダメダ・・・ダメナシダ・・・」

・フツ・・・
・スウウウ・・・

え? ええ!?

みるみるうちにかのんの姿が・・・

「「き・・・消えた・・・!？」」

11 UP TO GIRL・・。(後書き)

作者「アニメ本編に基づいて、God Only Knows ?
をやるぞ!」

耕也「あらかた察しはついたけどな・・」

作者「分かりやすくいいだろ」

耕也「次回はかのん編3話目だ!」

12 ワタシ透明・・・？（前書き）

作者「ついに12話かー・・・。

長かったなあ・・・」

耕也「ふむ・・・何か今回に関しては話すことがないかな？」

作者「固いこと言うなよ。何事もチャレンジだ」

耕也「何言ってるんだ、この人・・・」

12 ワタシ透明・・・？

「た、大変です！ かのんちゃんが消えちゃいました！」
動揺しているエルシィを桂馬がなだめる。

「落ち着け！現実^{リアル}にそんな芸当できるか！見ろ！」

桂馬の指差す先にはちゃんとかのんがいた。
・・・けど・・・

「なんか透けてないか・・・？」

「ダメダ、ダメダ・・・ワタシノウタナンテダレモキイテナイ・・・」
また壊れた！
このパターンは・・・

「あの頃と何も変わってない！ 私、まだ透明なの！！！」
あの頃？
そこへ桂馬が言う。

「いや、違う！ ちゃんと歌、聞いてたよ！」

バチッ・

そんな音がした。

「ウソ！・・・寝てたくせに！！」

スタンガンが桂馬へ飛ぶ！

ヤバイ！これは死ぬ！

※マジで安全なスタンガンだから安心しろ。

ギリギリ桂馬はスタンガンをかわした！

どこぞのバトルマンガだこれは！

ドス！ メキ メキ ドオン！

「木が折れたぁーっ！」

「ね、寝てたのは・・・その・・・」

「・・・それほど素晴らしい歌だったからさ！

まるで、天国にいるようだったよ！」

それって死んでるよな？

それを聞いたかのんは・・・

気が抜けたようにその場を去った。

「明日も・・・ここで・・・」

「・・・」

「・・・生き延びたぁ・・・」

「神様だいじょぶですか！！」

「トンデモネー女だな・・・」

「お前が無視してるからいけないんだろ。」

誰だって怒るわ」

「好きでやってるんじゃない。」

あいつの心の悩みを知る為に、揺さぶってたんだ」

悩みい？

「ここまでして悩みを知る必要があるのか？」

「当たり前だ！ いい言葉を教えてやろう」

「聞かなきゃダメ？」

「流れるに」

「チッ！」

「悩み」はボクらの

キラカード

命かけても

手に入れな！

けいま。

「ゲームの話だろ」

「・・・・・・」

なぜいつもスルー？

「大丈夫だ。 悪い印象も最後にフォローしたからな」

「・・・あれ・・・フォローだったんですか・・・」

まったくもって同感だな。

「悩みを話し始めたらすでに攻略50%地点にいる・・・。
ここからは積極的に行くぞ」

（桂馬宅）

「神様、かのんちゃんが出てますよ」

「ふうんカメ飼ってるのか」

名前がキタローって・・・。

妖怪退治でもやってそうな名前だ。

「しかし、積極的に会うとなるとかのんの情報がほしい・・・。
どうすれば・・・」

そうは言ってもアイドルの情報網なんてたかが知れて・・・。

・・・ん？

「あつた！」

「何がだ」

「情報網だよ！」

「・・・？」

（次の日）

「白川！」

「お、耕也。お前から離しかけてくれるなんて珍しいな」

「自分で言ってる悲しくならないのか？」

「別に」

スゲーなお前・・・。

「かのんちゃんの情報？」

「そうそう、お前ならよく知ってるだろと思ってさ」

そう、俺が昨日言った情報網とは

かのんファンの一人、白川だったのさ。

「何だ？ ついにお前もかのんちゃんの魅力に気づいたか？」

「・・・あ、まあな・・・」

「そうかそうか」

ま・・・駆け魂狩りのことは秘密だからな・・・。

「で、桂馬宅」

「シトロン？」

「そう、かのんはもともとシトロンっていうグループの一員だったんだよ」

「ふうん」

「シトロンはもともと、リーダーのR I M E^{ライム}って子を

売り出すためのグループだったらしいんだが・・・」

「潰れた、と」

ハッキリと言うね君。

「私知ってますよ！ かのんちゃんファンなら常識です！」

「ボクをかのんのファンにしてどうする？」

もっと攻略の役に立つ情報を集めろよ」

悪かったな。

「さらに次の日、屋上」

・・・。。。。。

「何で今日に限って来ないんだ！ せっかくボクが積極的に会おうとしているのに！」

「やっぱり忙しいんですよ。アイドルだから」

そうそうスタンガン振り回したりとか

スタンガン振り回したりとか

スタンガン振り回したりとか忙しいんだって。

『メールだよ☆』

「お」

何だ桂馬のPFPか。

「誰からのメールだ・・・かのん・・・？」

「CDにアドレスを書いて、コートのポケットに戻しておいた」

「抜かりはない」

どこかよく分からない場所

案の定かのんが待っていた。

「このアドレスやっぱり桂木くんのだったんだ・・・
ポケットに返してあった・・・」

スウ・・・

この前ほどじゃないけど、

少し薄くなってるぞ、かのんのやつ・・・。

「ねえ、私透明じゃない？」

「ちゃんと私の歌、届いてた？」

助けを求めるかのように桂馬に迫るかのん。

気圧された桂馬は答えた。

「あ、ああ・・・いい歌だった・・・」

・・・。。

「・・・」

「・・・」

パアアアアアッ

「ホントーっ!？」

「ああよかった、あのままじゃ仕事にならなかったんだもん」

「・・・」

さすがの桂馬も呆れているのか・
声にならない。

「久しぶりにちょっと落ち込んだ」
あれがちよっとだと?

じゃあMAXの時はどうなるんだ!?
この世の終わりか!?

感電死してしまうのか!?

※だから安全なスタンガンだつてば。

「あの・・・またメールしていいかな?

私、学校の友達なくて・・・

ちゃんと話したの桂木くんが始めてなんだ」
・・・ん?

ちゃんと話したことなんてあったっけか?

ちよつと考え込んだ桂馬は、攻略ではお馴染みの爽やかな声で
「ボクでよければいつでも……ん？」
返事をしたが、そこにかのんの姿はなかった。

『メールだよ☆』

「誰からのメールだ……かのん？」

『ヨロシクネヨロシクネヨロシクネヨロシクネヨ
ロシクネヨロシクネヨロシクネヨロシクネヨ
シクネヨロシクネヨロシクネヨロシクネヨロシ
クネヨロシクネヨロシクネヨロシクネヨロシク
ネヨロシクネヨロシクネヨロシクネヨロシクネ
ヨロシクネヨロシクネヨロシクネヨロシクネヨ
ロシクネ……』

「!!」

「!!」

……怖いという感情しかなかった……。

（桂馬宅）

『メールだよ☆』

かのんからの呼び出し。

「ごめんね、急に呼び出して……」

「いや、いいけど」

……。

「……うん、顔見たら元気でした！」

『メールだよ☆』

「収録で失敗しちゃって・・・」

『メールだよ☆』

「私、泳げないの・・・ステージから落ちたらどうしよう・・・」

『メールだよ☆』

「寝ぐせが直らない・・・」

かのんからの呼び出しは一日に36回に及んだという。

『メールだよ☆』

『メールだよ☆』

『メールだよ☆』・・・。

「・・・ぐふ・・・」

「ついに死人が出たか」

「神様だいじょーぶですかー！

しっかりしてください！」

なんだかんだでかのんの攻略は順調なようだな。

さて裏サクセスでもやるか。

「うう・・・ギャルゲーよ・・・ボクの心を癒せるのは君だけ・・・だ・・・
・・・ぐふ・・・」

「・・・」

さ、さてやっぱりグッ〇ーにするかな・・・。

～そして数日後のある日～

「またかのんの呼び出しか？」

「コレで何回目だ！ 殺す気かあいつは！」

とか言いつつ行くんだよなあ。

おもしれえやつだな。

「桂馬くーん！ こっちこっちー！」

「・・・ん？」

あれ？

今日は落ち込んでないのか・・・？

「桂馬くん！ 私今日すごいライブするの！」

1万人入るんだって！ こんな大きいドームでやるの初めてだよ！

すごいでしょ！」

死にかけの桂馬は必死に返事したのだろう。

ただただ流し気味に言った。

「・・・へー、それを言うためにわざわざ・・・アリガト・・・」

「夢みたい・・・みんな私を見てやってくるんだ・・・」

私はもう・・・透明じゃないっ！」

だが、桂馬はかってにしろとばかりにゲームを始めてしまった。

「もー、ゲームばかりして！ 人の話聞いてたの？」

「聞ける」

ウソつけ、聞いてねえだろ絶対。

「……あー！ 私の歌ー！ 桂馬くん、私の歌聞いてるー！」

え？ 歌？ あの桂馬が？

「や、やめろ！ 予習だよ予習！」

「何の予習ー？」

攻略の予習なんだろうーなー・・・。

そしてかのんは桂馬に問う。

「私の歌・良かった？」

顔を近づけられた桂馬はかなり赤面してしまっている。
・・・それ以外の理由もあるかもしれんが・・・。

「良かったらほめてほしいなー。 ほめてほめてー」
桂馬はかなり同様しつつも
かのんの頭を撫でてほめた。

「あっそろそろ行かなきゃ！ じゃーねー！」

・・・行ったか・・・。

「絶好調だな桂馬。 さすがだな」

「ホントですー！ もうさっきのナデナデじゃなくて、
口づけでもよかったぐらいですよー！」

もうかのんちゃんの心のスキマは埋まってるはずですよ！」

・・・ザワザワ・・・。
ん？

「何だ？」

「・・・鳴沢臨海ホールの方からだな」
鳴沢臨海ホールっていうと、
かのんがライブする場所か。

「捜して！ 早く捜して！」

「かのんちゃんがいらないぞ！」

「失踪した！」

何イイイ！？

何でだよ！

どうするんだ桂馬！

そこまで言いかけたが、俺は口を止めた。
顔つきが変わっていたからだ。

この顔の時の彼は必ずこう言う。

「・・・来たぞ・・・」

エンディングが・・・見えた・・・！」

12 ワタシ透明・・・？（後書き）

耕也「次回、ついにかのん編完結！」

作者「お気に入り登録数30件！

これなら？をやっても大丈夫だな！」

耕也「本気かこいつ・・・」

13 Shine star・・・! (前書き)

作者「さあかのん編、ラスト!」

耕也「そういえばかのんって、原作で刺され・・・」

作者「わーーーーーっ!」

ではどうぞ!」

耕也「刺されたらし・・・」

作者「お前は黙ってろ!」

13 Shine star・・・!

「かのんちゃんどこ行っただよ!?!」

「もう客入れやってんのよ!」

「取材の連中に気づかれんな!」

「捜せ!」

・・・・なんか大騒ぎになってんな・・・。

「かのんちゃんが失踪! 神様のおかげで元気になったのに、
また逆戻りしちゃいました! ー! ー! ー! ー! ー!」

「落ち着け、ポンコツ悪魔」

お前は落ち着き過ぎだ。

「ちゃんと、前に進んでるよ」

「ここが最後のイベントだ。

いいか、ここは最重要ポイントだ。

絶対に一番にかのんを捜し出すんだ!」

「なるほど」

「このイベントは誰にも渡さない!

ギャルゲーマーの名にかけて!」

よっしゃ、なら俺はじっちゃんの名にかけてやる!

ここでエルシィからの疑問が。

「捜し出すといってもかのんちゃんは気配を無くせるんですよ？
いったいどうやってこの広い場所で透明人間を捜し出すんですか？」

まあ、それくらい桂馬なら・・・。

「・・・・・・・・・・」

え？ マジ？ 考えてないの？

「困ったときは選択肢総当たりだ！」

「・・・それって・・・」

「手当たり次第捜すぞ！」

「フツーに言えフツーに！」

かーのん かーのん かーのん

「うはあ、そこらじゅうかのんコールだな。
こりゃ急がないとまずいな」

（数分後）

「いませんねえー」

「こっちもいなかったぞ」

「・・・コンサートの開演までに見つけないと。」

中止になったら即アウトだ・・・」

「・・・でも見えないヤツをどうやって捜しだすんだ・・・？
いっそ駆け魂だけでもでてくりゃいいのに・・・」

「駆け魂・・・・・・・・・・！」

すると今の発言で何かを思いついたのか、エルシィが提案した。

「神様！ 駆け魂センサーがありますよ！
これなら透明でもどこにいるかわかります！」
確かにナイスアイデアだけど
あるなら最初から言えって話だ！

「かのんちゃんの駆け魂は登録してあります！
再検索してみますね！」

・・・わずか数秒後。

ドロドロドロドロドロドロ・・・

「鳴った!？」

「ち、近いですよ！」

「・・・あっちのほうか・・・？」

「・・・待て、耕也」

桂馬が俺を止めた。

桂馬の目線の先にはかのんが座っていた。

・・・すごく透明だが。

「・・・かのん・・・」

「!・・・け、桂馬くん！」

かのんは桂馬に気づいた。

ちなみに俺はとっさに隠れたのさ。

すごいだろ。

・・・ていうかコンサート開演まで時間ねえぞ！

急げ桂馬！

「何してるんだ？ 今日はずいコンサートするんじゃないのか？」

「そ・・う・・なんだ・・そうなんだけど・・そうなんだけど・・・・！」

「・・また透明になるのが怖い？」

「・・・どうやら凶星のようだな。」

「アイドルになって目立たない自分から抜け出した。でも、いつも不安なんだ。人から注目されなくなったら、ほめられなくなったら、また透明になる気がして」

「・・そ、そうなの、そうなの！ 桂馬くんは私のこと何でも分かってる・・！」

「ぐ、ぐーぜんだよ。 たまたまそんな話に出会ったことがあるだけだ。」

「・・ゲームで」

結局ゲームなんだ。

せっかくいいことだったのに。

「桂馬くん・・桂馬くん・・・」

かのんはすごい勢いで桂馬に飛びついた。

「桂馬くんずっと私といって！

私を勇気づけて！

私を見てて！」

「あんな沢山のひとにほめられるの・・ムリだよ・・。」

今度こそ私・・・失敗しちゃう・・・」

「でも桂馬くんが・・・私を支えてくれたら・・・私・・・」

・・・いけるか・・・!?

「いやだ。ベンベン」

・・・。。。。。

「ベン・・・ベン・・・?」

ベンベン・・・?

「人の言葉でしか自分を確認できないのか?

それじゃいつまでも透明なままだよ!

人任せはやめろ!

君の・・・

お、お前の歌・・・いいと思うぞ・・・」

「君は君自身の力で・・・輝ける！」

「・・・だ、だめだよ・・・私の力なんて・・・
一人でなんて・・・できないよ・・・」

「・・・もうやってきたよ・・・」
え？

かーのん かーのん かーのん

うわ、さっきより歓声が増してやがる！
おいしい、開演が近いぞ！

「君の光に惹かれて・・・皆やってきた・・・！」
「・・・・・・・・・・」

「ボクがひとりじめできないよ・・・」

「私・・・ひとりのためにずっと歌っても・・・
よかったんだよ・・・」

「じゃあね」

・・・ボヒユウウウ

「あ、出た」

ギユルッルルルッル
・・・ボムッ！

「駆け魂勾留！」

「手馴れてきたな・・・」

　　＼ 鳴沢臨海ホール ＼

ひとりのアイドルがステージに立つ。
名前は中川かのん。

今歌っている曲は「らぶこーる」という新曲だそうだ。

「……………」

「神様……かのんちゃん……すごいです……」

「……今はまぶしくてみえない……」

「神様、現実のアイドルのこと見直しましたか？」

「ま、まだまだだな」

「おいおい」

「……それにかのんはもうアイドルじゃないぞ……」

「自ら輝く……星スターになったんだ……」

「……星スターか……」

中川かのん、
なるりん制圧。

13 Shine star・・・! (後書き)

作者「さあて、次回はちよつと長いぞ!」

耕也「刻一刻と、終わりの時が近づいてるな。
終わるわけではないけど」

作者「次回、お楽しみに」

作者「今回のお話は耕也目線から外れて

お送りします。

普段分らない、桂馬やエルシィの感情が
分かるかも・・・！」

耕也「じらさなくていいから早よ言え」

悪魔、それは人間に不幸をもたらす存在。
今回のナレーションは耕也ではなく
客観的視点から見たお話・・・。

〽桂馬宅〽

プルルルルルル

第一話 冥府よりの脅威？

ガチャ

麻里「はい？ ……あら児玉先生・・・

・・・家庭訪問ですか・・・？

・・・はい・・・はい・・・分かりました」

ガチャリ

麻里「・・・何なんだあの児玉って野郎は！

うちの息子に因縁ばっかつけやがって！

着たら2，3発ぶん殴ってやる！

……………ってわけにもいかないわよねえ……………」

ひとまず麻里は風呂場へ向かった。

・・・チャポン・・・。

麻里「・・・桂馬は根はいいやつなんだけどねー・・・

根から上がダメなのよねえ・・・」

ガタツ・・・

麻里「・・・誰だ！」

・・・麻里は窓を開けたが、
そこに人の姿はなかった。

桂馬「うわあああああああつ！」

麻里「・・・はあ・・・朝から元気ねえ・・・」

第二話 デビル・クッキング

桂馬「な、なんじゃこりゃああーっ！」

桂馬の目の前には得体の知れない物体が動いていた。

耕也「朝からうるせえな・・・んだこりゃ・・・」

エル「何って、お弁当ですよっ！」

桂馬「どこの世界に自走する弁当があるかーっ！」

エル「でも生きてるほうがお昼までさめないですよ！」

エルシイは弁当(?)を手取る。

エル「はい、神にーさまには特盛りですよー」

桂馬「いらん」

桂馬「不気味なもんばかり作りやがって、
絵描き歌のコック以下だおまえは！」

耕也「それは言いすぎなんじゃないのか？」

エル「ひどいですー、これでも料理には自身あるのにー！」

桂馬「どこがだ！」

エル「神にー様は私に冷たすぎます！ 私、神様より

300歳は年上なんですよー！っ！」

桂馬「それがなんだ。 ボクは昨日1万年の時を生きたぞ。

ゲームの中で」

桂馬「普通、お前みたいな巻き込みキャラは何か一つは
すごいところがあるもんだ」

耕也「あー、四〇元ポ〇ットとか〇〇S団とかな」

桂馬「だが、お前には何にもない！ ホントに悪魔かお前！」

エル「うううう・・・」

桂馬「お前なんかバグ持ちゲームと一緒にだ！

こんの、バグ魔があああああつ！」

（舞島学園高校）

エル「ううっ・・・うっ・・・う・・・

うーうーうー！」

小阪「あらーどしたのエリー？」

エル「おにー様がひどいんですー！」

小阪「何だ、あんな底辺兄貴のことなんか気にしないでいーじゃん」

エル「そりゃ私、ほんの少し、ほんのほんの少しダメなところもあ

りますけど・・・」

エル「でも料理だけは自信があっただんですー！ー！

あとお掃除とー。

でもおにー様は認めてくれないー！ー！」

ボタン

エル「はあ・・・私から料理を取ったら何がのこるんですか・・・

あとお掃除と」

小阪「さらっと切ないこと言うやつだな」

小阪「要するにエリーは、オタメガに料理をほめてもらいたいんだ」

小阪「じゃ、これ作ってあげたら？」

ちひろはエルシィに料理の本を差し出した。

ケーキの写真が載っていた。

エル「こ、これは・・・あ、赤白です・・・」

小阪「ケーキよ、ケーキ」

小阪「そんなもの作ってもらったら、女ひでりのオタメガなんてイチコロよ」

実は女ひでりでもなかったりするが・・・。

エル（そうか・・・今まで地獄の基準で考えてました・・・。

こういうのが人間が喜ぶものだったんですね・・・）

エル「よし、私作ります！ この赤白を！」

小阪「あ、その本終わったら捨てといてー」

（家庭科室）

エルシイは本をひろげて読んだ。

エル「なにに、お菓子作りは科学です。

正確にレシピ通りに作りましょう・・・了解です！」

エル「まず材料を計ります・・・砂糖を100g・・・

・・・こちらでも砂糖を使うんですね！

新しく買わなくて済みました！」

数分後・・・。

エル「次はメレンゲ！ えっと混ぜる卵は何にしよう・・・」
ビキ・・・

そのとき卵の殻が割れて、
ドラゴンが飛び出してきた。

エル「キャアアアアマンドラゴン！

こんな珍味の卵、持ってきてたっけーーーーっ！」

エルシイは追いかけれられ、テケテケと逃げていった。

エル「何とかメレンゲができました・・・。

マンドラゴンに追いかけれながらだから・・・
ちよつと量は減ったかもしれないけど・・・。」

耕也「おい、あれエルシイじゃないか？」

桂馬「ん？」

耕也と桂馬がエルシィに気づく。

エル（わ・・・ま、まだ早い・・・）

エル「か、神にー様！ お待たせしました。

本日神様は、私の真の力をごらんになることでしょう・・・。

おほほほほほほ・・・」

桂馬と耕也はただボーッとしていた。

（再び家庭科室）

エル（神様、見ててください。 わたしだってやればできます・・・！

この赤白に私のアクマ生命をかける・・・！）

そして・・・

エル「やったあーっ！ 見事にレシピ通りです！

これにイチゴをのせたら・・・イチゴをのせたら・・・」

・・・そのとき。

エルシィの背後にマンドラゴンがいた。

エル「マンドラゴン・・・戻ってきたの・・・」

エル「こ、コラ・・・このケーキはエサじゃない・・・、

あ、あっちへ行つてー！ー！」

エルシィは必死にマンドラゴンを止めるが、
はずみでケーキがマンドラゴンの頭に乗り、
マンドラゴンはそのまま飛び去ってしまった。

エル「うう・・・」

（桂馬宅）

桂馬「お前、今日授業出てなかったな。」

何やってたんだ？」

エル「え？　　ちゃ、ちゃんと勉強してましたよっ」

エル（今日はダメだったけど、いつかまた神様に
作ってあげるんだ、イチゴのケーキ・・・）

すると桂馬はエルシイの心を察したかのように、

桂馬「おい。」

言つとくが、ボクは甘いものが大嫌いだからな」

エル「え・・・」

ええーーーーー・・・？」

桂馬「うわあああああああああつ！」

麻里「はあ・・・朝から元気ねえ・・・」

第三話　我思う、故に理想あり

桂馬「な、何じやこりやああああつ！」

桂馬（ボクの優雅なゲームライフが失われて、
どれだけの日々が過ぎただろう・・・。

すべての元凶はこいつ・・・現実^{リアル}が放った最悪の刺客！）

桂馬「お前なんかバグ持ちゲームと一緒にだ！

こんのバグ魔がああああああつ！」

（舞島学園高校）

耕也「おい、いいのか？ あいつのこと」

桂馬「いつもながらキャラ性の弱いアクマだ。

落ち込むくらいなら呪いの一つでもかけてみせろってんだ」

耕也「そういうことじゃなくてだな・・・」

桂馬「まあいい、たまには現実^{リアル}にも思い知らせてやらないとな」

耕也「・・・・・・・・」

桂馬「とにかく現実^{リアル}というのは、合理性の低い世界観だからな」

児玉「英語の試験を返しますよー」。

ミンナできがわるいですねえー、んふふふー」

耕也「・・・・・・・・ゲ！・・・・16点だと・・・・・・・・」

児玉「桂木君。桂木くーん。桂木ー！」

児玉「またゲームばかりして、いいんですかーそういうタイドで」

桂馬「大丈夫です、100%両立できてます。

授業も聞いてるし、結果も問題ないはずです」

児玉「・・・・・・・・・・」

100点取ってりやいいってもんじゃねーぞ!!
ああー!？」

桂馬（・・・なぜ怒られるんだろう・・・）

兎玉「フン・・・次、桂木エルシィ。

桂木妹。・・・返事はどしたあー！　もしもーし！」

耕也「エルシィいなかったな」

桂馬「全くどこ行ったんだよあいつは。

いつも一緒にいるんじゃないかったのか？」

耕也「やっぱり今朝のアレが・・・」

耕也が言いかけたそのとき。

グオオオオオオオオオ・・・

桂馬「うわあああああつ！」

シュウウウウウン！

耕也「だ、大丈夫か？」

桂馬「・・・な、何だあ・・・？」

耕也「おい、あれエルシィじゃないか？」

桂馬「ん？」

視線の先にはボウルをかかえたエルシィがいた。

エル「か、神にー様！　お待たせしました。

本日神様は、私の真の力をごらんになることでしょう・・・。

おほほほほほ
・
・
・
・
・
└

耕也「・・・心をやってしまったか・・・？」

桂馬「うーむ……」

6時間目 体育

児玉「今日は木村先生が休みです。

かわりに私が体育をみますよー」

耕也「何でよりもよって児玉なんだよ……」

児玉 「とりあえず走れー！

グラウンド20周!

え
ー
ー
ー
。

全員、いやいや走り出す。

桂馬 「う・う・う・う」

耕也「落とし神さーん、大丈夫ですかー？」

児玉「桂木くくん、ゲームばかりではいけませんね。」

ビリの方はさらに20周追加ですよ。

まあさっきのことを謝れば10周追加にしてあげてもいいです
が」

桂馬（・・・さっきのこと根に持つてるのか・・・。フ・・・ボクに挑戦しても・・・）

桂馬はゲームを取り出した。

すると桂馬のスピードが上がった！

桂馬「ボクは落とし神、現実リアルの妨害なんぞ

軽く呑みほしてくれる！ わーっはははははははははは！」

バタアアン。

・・・一時的にだけ。

児玉「んーふふふ、どうだ思い知ったかー！

なまいきな奴め！

お前みたいな人間はロクな大人になりませんよー！

お前のような輩が現実とゲームの区別がつかなくなつて
犯罪者になるんだあああつ！」

桂馬「・・・ゲームと現実リアルを一緒にするんじゃない」

桂馬「ゲームはゲーム、現実リアルは現実リアルさ。

何でもゲームと結び付ける人の方が区別できてないんだ」

桂馬（そうさ、こんなどうでもいい現実リアルのくせにつけあがつて！

もう現実リアルに付き合つてやるのは終わりだ！）

すると児玉は桂馬に飛びかかった。

児玉「もしもーしーし！ 今この私に何を・・・！」

グオオオオオオオツ！

耕也「なんだありや・・・？」

シュツウツウウウウウツ！

マンドラゴンが桂馬の横を通り過ぎた。

児玉「・・・・・・・・・・・・・・・・」

桂馬「まったくんでもない目にあった。

エルシイの仕業だな」

耕也「つかエルシイだいじょうぶかなあ。

・・・ん？ 何だありゃ」

耕也の指差す先には

ケーキがあった。

桂馬「・・・・・・・・・・」

耕也「・・これって・・」

ピロリロ

桂馬「あーっ次元イベントだあ☆」

耕也「お、おい待てよ！」

第四話 ある母親の日常

麻里「誰だ！」

だがそこに人の姿はなかった。

麻里「人ん家の風呂覗くなんて許せねえ・・・

とっ捕まえてやる！」

麻里は風呂場からでて

覗きを探索し始めた。

カラ・・・カラ・・・

台所のほうから聞こえた。

麻里（え？ やだ・覗きじゃなくて・・・泥棒・！？）

麻里は花瓶を手に取り、台所へ向かう。

そして・・・

麻里「・・・えい！！！」

思い切り殴った。

桂馬「ギヤアアアアアッ！！」

麻里「・・・え？ け、桂馬！？ 大丈夫！？」

そこにはフォークと皿がおいてあったという・・・。

プルルルルル

麻里「はい・・・家庭訪問は中止ですか・・・。

はい、分かりましたあ」

ガチャリ

麻里「ベーーーーだ」

桂馬「言つとくが、ボクは甘いものは大嫌いだからな」

エル「・・・・・・・・・・」

ええええええつ・・・？」

第五話 冥府よりの脅威？

麻里「誰だ！」

だが、そこに人の姿はなかった。
正体はマンドラゴンだったのだ。

マンドラゴンは飛び去った。

そのとき、頭の上にあったケーキが落ちた・・・。

ピンポーン

児玉「・・・・・・・・・・」

ピンポーン

児玉「・・・・・・・・いないのか・・・？」

グオオオオオオ・・・・・・・・

児玉「ん？」

児玉は音のしたほうを見上げる。

児玉「・・ギイヤアアアアアアアアアッ！」

児玉は逃げ出した。

彼が見た光景は、自走する弁当が
マンドラゴンを丸呑みしている光景だったという・・・。

14 Coupling With With With . . . ?

作者「God Only Knows ? までもうちよつとか」

耕也「お前、マジでやる気？」

作者「何で？」

耕也「もし？をやって、今よりお気に入り登録数が
少なくなったらどうすんの？」

作者「・・・次回をお楽しみに・・・」

耕也「おい！」

15 とある少女の駆け魂・・・（前書き）

作者「今回ののはなしは結構短いぞ」

耕也「なんつーカミングアウトだ・・・」

作者「しかたねーだろ。」

本当に短いんだから！」

耕也「そんなだからお気に入り登録数が減るんだよ！」

作者「それを言うなあああああつ！」

15 とある少女の駆け魂・・・

俺たちの学校に新たに転校生がやってきた。
だが

『一瞬だけ・・・駆け魂センサーに反応があった気がするんです・・・』
」

エルシィはそう言っていた。

それが本当なら駆け魂があの子に存在しているということになる。
・・・確かめてみるか・・・？

「で、何でボクと一緒にいかねばならん？」

「いいじゃねえか別に。」

駆け魂が入ってたらお前が攻略することになるんだからな」

「フン、あんなもの・・・」

グルルルルルル・・・

「・・・どしたんだ・・・？」

「・・・腹を壊したらしい・・・」

「そういえば何回もトイレに入ってたな・・・
大丈夫か？」

「原因はわかっている・・・あの悪魔だ・・・くそっ・・・！」

「？」

（放課後）

俺たちは雨宮真紀をつけていた。

「何でこんなことをしないといけないんだ・・・」

「お前はどうかんだ？」

「あれは攻略の時だけだ！」

誰が好き好んで現実^{リアル}なんかつけまわすか！

そーですねー。

「あ・・・」

ん？

立ち止まって・・・かがんで・・・

「・・・なんだ靴紐がほどけただけか」

「ん・・・？ 耕也、よく見ろ・・・」

「あ？」

・・・

・・・。

「・・・なんかぜんぜん結べてないぞ・・・」

「・・・あそこまでひどい現実^{リアル}女は始めて見たな・・・」

「紐結べないだけでそこまで言うかね・・・」

・・・。

あー、なんかイライラしてるっぽいぞ・・・。

「・・・何で結べないの？」

「まさかこれが心のスキマの原因じゃあるまいな・・・」

「ハハハ・・・」

「あーもう！」

真紀は手を地面に叩きつけた。

その地面はコンクリート製で、

真紀も軽く叩いたように見えた・・・。

だが・・・。

ドゴォー！

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

地面にヒビが入った・・・。

「・・・桂馬・・・」

「アレは攻略したくない・・・」

「うん・・・今回ばかりはその気持ち、分かるわ・・・」

（桂馬宅）

やっぱり駆け魂だな、あれは。

「じゃあ気のせいじゃなかったんですね」

「てことだな。よし、桂馬さっそく・・・」

「待て、確証もないのに攻略できるか」

「じゃあ次にセンサーが反応したら、

攻略を開始しよう！

そのときがサインです」

「頼むぞ・・・センサー鳴らないでくれえ・・・」

コレで駆け魂がいることはハッキリした。

さて、大波乱はいつ起きるのか・・・。

やはり俺はこの時、

自分が攻略するなんて思ってもみななかっただろう・・・。

15 とある少女の駆け魂・・・（後書き）

耕也「結局これどうなんの？」

作者「さあね」

耕也「何じゃそりやあ・・・」

16 神の逆襲・・・！（前書き）

作者「えー、このお話は野球に関する話です。

野球に詳しくない人は少し分からないかもしれませんが

その場合、飛ばしてもらっても構いません。

本編には関係ないので、ご安心を」

耕也「お前ってホントに読者に対して・・・」

作者「シャラアアアアップ！！」

16 神の逆襲・・・！

以前、俺は落とし神と対戦をし、勝った。

12点差つけて勝った。

そして今日、落とし神の逆襲が始まる・・・。

～ある日の桂馬宅～

「勝負だ、耕也！」

「・・・え？」

俺は落とし神から挑戦を受けた。

「パ○ポ○だ。あれから選手を鍛え上げ、技術も上げた。もうお前には負けん！」

神の本気を見せてやる」

「・・・いいだろう。やってやる！」

こうして、試合が始まったのだ。

1回表 桂馬0－0耕也

「フッフ・・・鍛え上げた神の力、思い知るがいい！」
ズバン！

『ストライーク』

くそ、スライダーか・・・。

・・・って157kmだとお！？

どこの世界に157kmのスライダー放るピッチャーがいるんだよ！

『ストライーク バッターアウト チェンジ』

「・・・マジかよ・・・」

1点も取れなかった・・・。

これがゲーム世界の神か・・・！

1回裏 桂馬0－0耕也

フッ、俺の得意球、フォークをおみまいしてやる！
いくぜ！

『ビシュ！』

よし、振った！

『カキイイーン！！』

・・・

・・・なんですとーーーーー！

『入った！ 先制ホームラン！

期待通りの一発！』

「・・・マジかよ・・・！？」

「フッ、本気を出せばこんなものだ」

2回表 桂馬3－0耕也

もう3点も取られてしまった・・・。

「くそっ、負けるか！」

『ストライーク バッターアウト

ストライーク バッターアウト

ストライーク バッターアウト チェンジ』

「さ、三者連続三振だと・・・」

「フッ、こんなものか？」

「くそっ、やってやる！」

2回裏 桂馬3－0耕也

『カキイイイイン！！』

「いったな」

「・・・・・・ウソお・・・」

『入った！ 満塁ホームラン！ 引き離す！』

ああああああああああ・・・。

5回表 桂馬9－0耕也

五回の時点ですでに9点差だと・・・！

・・・フッフ、こうなったら禁断の技・・・

「フ○ダ○」を使うしかあるまい・・・。

「あ、言っとくけどフ○ダ○なんか使うなよ」

・・・読まれとるーーーー！
恐るべし落とし神・・・。
だてに攻略してないな・・・。

「フッ、野球だけじゃない。さらに裏サクセス、
プロフィール、ミニゲーム高得点、ペナント35回連続優勝、
さらに彼女攻略のエピソードまですべてクリアしている」
・・・極めとるーーーーー！

だが、俺にチャンスが訪れる。
桂馬のエラーが2回、そしてフォアボールで満塁の状態になっている。

「いける！」

「フッ、どうかな？」

俺は桂馬のこの発言はハツタリかと思っていた。
だが違った。

『カコオン・・・』

だーーーーっ！　ゴロオオオオ！

だがいい！　1点はもらったぜ、いや1点ゲットだぜ！

しかし、桂馬のスーパープレイ炸裂。

まずセカンド、ファーストでゲッツーを取る。

だがこれで1点はもぎとったはずだった・・・。

だが、その後のホームへの送球で・・・

『アウト　チェンジ』

・・・。

「トリプルプレーだとおおお！？」

「フッ、神の前ではすべてが無力だ」

7回裏 桂馬14－2 耕也

もう7回か・・・。

なんとか2点は取ったけど・・・。

『カキイイイイン！！』

またホームランか・・・・・・・・ん？

いや、センターフライだな・・・。

『アウト』

『カキイイイン』

お、今度は打ち上げた。

『アウト』

『ストライーク バッターアウト チェンジ』

うおおおおお！

久々の奪三振！

8回表 桂馬14－2 耕也

「よし、ピッチャー交代だ」

「よっし、変わった！」

これでいける！と思ったが
甘かった。

ズバン！

『ストライーク 170km！』

ストライーク 168km!

ストライーク 170km!

バッターアウト バッター、手も足も出ません!」

「やかましい!」

170kmなんか打てるか!

9回裏 桂馬17ー2耕也

『ストライーク バッターアウト ゲームセット!』

・・・15点差つけられた・・・!

「フッ、これが神の力だ」

俺はこの日、落とし神の恐ろしさを改めて知った。

だが、また対戦する日がくるかもしれない。
そのときへ向けて特訓だな。

16 神の逆襲・・・！（後書き）

作者「次回から栞編しおりがスタート！」

耕也「まさか負けるとは・・・」

作者「お楽しみにー！」

17 大きな壁の外と中・・・（前書き）

作者「このお話は、原作では葉の心しおりの中が分かるように

描かれています。が、この小説は耕也主観で見ているので
葉の心の中は分かりません。

原作を読んでいる方は違和感があるかもしれませんが
あらかじめご了承を・・・」

耕也「葉視点も取り入れりゃ良かったじゃねえか」

作者「・・・その手があったとは！」

耕也「お前、やっぱバカだろ」

17 大きな壁の外と中・・・。

「神にーさま！ お夜食のケーキができましたあ！」

・・・・・・。

ボカアアツアン！

「うわあああああああつ！」

（次の日 学校）

「大丈夫ですか神にーさま！」

あ、あれはその・・・ちよつと小麦粉の分量を間違えて・・・
エルシィの弁解が通じるわけもなく

「人間界では、それでケーキが爆発したりしない！」

確かに。

「お前は！ 人間界のことを知らなさすぎる！」

少しは一般常識を勉強しろ！」

「何度も言わせるな、今時のパートナーキャラは知性と個性が必要なんだ」

「知性と個性？」

「じゃー神様は私の今時のパートナーですね！」

「お前主観で話すな！ そっちがパートナーなの！」

「私もちゃんと教習うけました！」

「受けてそれなのか？」

当然の疑問をぶつけた。

「うう・・・に、日本史なんか優でした。

ニホン博士です」

「ちなみに・・・最後に習ったところは何だ？」

「えーっと・・・確か・・・くろふねがどーとか・・・こーとか・・・

」

「グラウンドの横に図書館がある。

そこで、世の中のことを勉強しろ」

「あーあ、大変だなあ」

「何言ってる。 お前も行くんだ」

「・・・は!？」

「知ってるぞ、この前の英語のテスト

16点だっただろ」

「う・・・!」

「というわけで図書館」

「こちらの学校は何でも揃ってるんですねー」

「まあそうだな」

「よし、勉強しましょう！ いっぱんじょーしき、いっぱいんじょーしきー」

ノリノリだなあ。

「・・・うお・・・こんな単語があったとは・・・
盲点だった・・・」

「う・・・うう・・・ううう・・・」

「・・・どうしたんだ・・・？」

「・・・かっこいいです・・・」

エルシイは本を見て言った。

「・・・これは・・・消防車・・・？」

「消防車・・・今の時代にはこんなものがカッポしているんですね・・・」

カッポって・・・。

「もつとこの車のこと知りたいです・・・」

「んじゃ捜せばいいんじゃないか？」

「そうですね！」

てか勉強しに来たんじゃないのか？

「うー・・・見つかりません！」

本が多いですー・・・」

「うーん・・・じゃあ図書委員に聞いてみたらどうだ？」

「あっ、そうですね！」

「・・・あ、あの子でしょうか・・・」

エルシイの指差す先には

本を読んでいる女の子がいた。

胸に図書委員の名札をつけているから間違いないだろうな。

へー、結構かわいい娘こだな・・・。

まあ、それは置いといて・・・。

「よし、聞いてこいよ」

「わかりました！」

「す、すみませーん！ えと、これと同じような本はどこにあるんでしょうか」

「．．．．．」

．．．あれ？

聞こえてない．．？

「す、すみませーんっ！」

「！」

お、気づいたみたいだな。

「．．．．．」

「．．．．．」

．．．しゃ、喋らん．．この娘．．。

．．．そしてようやく発した第一声が．．

「な、なにか．．用でござるか．．？」

．．．．．え？ ござる？

「．．．ござる？」

「！」

『もっと危ない岡っ引き』

．．．．．読んだ本のセリフがうつったのか．．？

．．．しかしホントに喋らん娘だな．．。

「あの一、消防車が載ってる本。もっとありませんか？」

・ ・ ・ ・ ・

「 ・ ・ ・ ・ ・ 」

・ ・ ・ ・ ・ いかん。

なんかイライラしてる自分がある ・ ・ ・ 。

「 ・ ・ ・ ほ、放課後に ・ ・ ・ 来てください ・ ・ ・ 」
やっと喋ったか。

「放課後 ・ ・ ・ 放課後ですか？」

「 ・ ・ ・ ・ ・ 」

・ ・ ・ ・ ・ 」

・ ・ ・ ・ ・ なんだこいつ ・ ・ ・ 。

・ ・ ・ そのとき。

ドロドロドロドロドロ ・ ・ ・

「 ！ 」

「駆け魂サイン ・ ・ ・ 」

・ ・ ・ じゃあもしかして ・ ・ ・ この娘_こに ・ ・ ・ ？

「 ・ ・ ・ 静かにお願いします ・ ・ ・ 」

「耕也さん！ 大変です、あの娘_こに駆け魂がいました！」

「聞いてたよ。 ひとまず桂馬に報告だな」

「神様ー！ こっちですよこっちー！」

「つかゲームやめろ」

「図書委員の娘_こに反応が！」

「・・・またか、もう図書館へは行き飽きたよ」
は？

「最近ゲームで絶対出てくるんだよ、図書委員が」
またゲームの話か・・・。
もう慣れたけど・・・。

「今や図書委員は激戦区中の激戦区だ！
よっぽど優秀なやつじゃないとやる気ゼロだな」
「s i g h・・・」
s i g h・・・。

「まあ優秀ではなかったよ。消防車の本、すぐには教えてくれなかったもんな？」

「はい」
「しょーぼーしゃ・・・？」

ひとまず、彼女のところへ向かうことに。

「中途半端なヤツだったら、抗議のユーザー葉書だしてやる！」
「どこ宛にだ・・・？」

ガタッ・・・ゴトン・・・。
「ん？」

音のした方を見ると、さっきの娘こが台車を押して・・・。
・・・って本、多すぎじゃないか・・・？

そしてエルシィの前で止まった。

「この図書館で消防車が載っている本・・・これで全部です・・・。

458冊あります・・・」

「!」

4・5・8 いいいい!?

そして彼女は本の説明を始めた。

「ここまですが消防車がテーマの本・・・

コレは挿し絵に消防車が載ってます・・・

これは根津という刑事の思い出話で、火事のくだりが・・・」
す、スゲエな・・・。

「フーン、ウチの図書館すごい検索ができるんだな」
桂馬は言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼女は何かを言いたそうにしていたが・・・
やがて立ち去ってしまった。

「無口な娘ですね」

「・・・なかなかよさそうなやつじゃないか」

「そうかな・・・?」

「神様、また今回も難敵そうですね・・・」

「ところでお前は、何の勉強をしていたんだ・・・?」
消防車です。

毎度のごとく、エルシィの説明が始まった。

「汐宮 栞しおり、2年C組 12月26日生まれ・・・

157cm、41kg、B型、図書委員……」

「すごく無口な娘だったが、

あんな娘と仲良くなれるのか？」

「分かるもんか。だがまず、図書委員の娘には鉄則がある」

「そうですねー」

耳をすませば

聞こえてくるよ。

文系少女の

ココロの声が。

Keima.

「……ポエム……？」

「文系女子は物静かではあるが、頭の中では人一倍考えてるものなんだ。

ギャーギャー騒ぐ割に頭カッポなんてのと対極だ」

「へー」

「いや、それは多分エルシィのことじゃ……」

「この内的な二面性が、文系女子の魅力！」

これからは文系女子だよーい！」

「分かりましたよおーーっ！」

このコントも、もう飽きてきたな……

「でも、どうやってそのココロの声を聞くんだった？」

俺が当然の疑問を問いかけると桂馬は答えた。

「これだから素人は……。ココロの声なんていつでも聞けるじゃないか」

「え？」

「ちゃんと画面に出るだろ、モノログで」
「……………」

「いや、それはゲームの……………」

「じゃ、攻略不可能だな」

「おいおい！」

「神様あー！」

「昼休み 図書館」

「ひとまず栞を捜すか」

「そこにいるぞ」

俺は指差した。

「本をじつと見てるな……………」

・・すると、栞が後ろへ転倒しそうになった。

「あ、危ない！……………桂……………ま……………」

桂馬はいなかった。

いつの間にか栞の後ろに立ち、

栞が倒れないように防いだのだった。

「間一髪だな……………」

「どうしてあの動きが体育で出せないんでしょう……………」
「そこを突くなよ。」

「・・・これ、処分になる本か」

桂馬は本を手に取り、処分と書いてあるダンボールに入れた。

しかし、なぜか栞は桂馬を見つめて
何かを考えているように見える・・・。

・・・。
・・・。

長い沈黙が続き、そして栞が発した。

「・・・あ、

ありがろん・・・。」

俺は首を傾げた・・・。

17 大きな壁の外と中・・・（後書き）

作者「神のみ1期の中では栞が一番好きかな」

耕也「だから何だと言うんだ」

作者「いや、特に何もないけど・・・」

耕也「次回、栞編第2弾！」

18 わたしの中の…。(前書き)

作者「いやあ、ついにここまでできたかあ。
長い道のりだった」

耕也「そうですね！」

作者「いやあ、お前はと思う？」

耕也「そうですね！」

作者「・・・山」

耕也「そうですね！」

作者「川」

耕也「そうですね！」

18 わたしの中の・・・。

・・・ありが・・・ろん？

今、この娘・・・ありがろんって言ったか・・・？

自分のミスに気づいたのか、

葉は顔を赤らめて本で顔を隠した。

「経済原論」って本を持ってるな・・・。

論の部分がうつったんだな・・・。

「・・・・・・」

ま、また黙り込んだぞ・・・。

そして彼女はまた立ち去り・・・。

「しかし、本ってもんは・・・もうなくなってもいいな」

「！」

でた！ 恒例の怒らせ！

スタンガンでもまだ懲りてないみたいだな。

「本なんて場所をとるばかりだし、全部データに移してしまえばいいんだ」

うわぁーお・・・。

これまたキツイ・・・。

これを聞いた栞は、また考え込む。

そしてトドメが。

「全部スキャンしちゃえば、本なんか全部捨ててしまえるよ」
「！」

栞は桂馬の目の前に立ち、そして・・・。

「ば・・・ばかぁー・・・」

スタスタスタ・・・

そう言って去っていった。

「お前ひどいぞ。本好きなヤツにあんなこと言ったら
誰だって怒るって。本には本の良さがあるのに」

「フン、ボクはコンテンツにしか興味ないんだ」

「ゲームもデカイ箱のやつに限ってクソゲーだったりするんだよ
あー、あったねそんなゲーム。」

「それは知りませんけど・・・
わざわざケンカを吹きかけなくても・・・」

当然の発言に桂馬が答える。

「だが、おかげでモノローグが聞けた」

「……モノローグ？」

「ココロの声だよ。無口なやつだし、普通の会話じゃそうそう出てこない」

「フーン、じゃあわざと怒らせてココロの声を聞いたってコトか・

」
「現実^{リアル}はどーしようもなく不親切な設計だからな。

モノローグがみえなきゃ見えるようにしないと」

「相変わらず高感度が下がることを恐れないところがスゴいですね・」

だが、そんなエルシィに俺はつつこんだ。

「……ところでお前は何してんだ・・？」

「これはですねー・・消防車の本です！

せっかく栞さんが探してくれたので読もうかと思ひましてー・・。
ほらーこんな大きな消防車ー・・☆」

・・・・。

今回もこいつは、役に立たなさそうだな。

俺と桂馬は思った。

栞は本を読んでいる。

ホントに喋らない娘^こだ。

そして桂馬が言う。

「フフ、ココロの声が聞こえる・・・。
聞こえているぞ・・・」

「・・・まだ「ばか」って言われたただけだろ・・・」

（引き続き 図書館）

俺たちが座っているテーブルの隣で
図書委員の会議が行われている。

視聴覚ブースができるらしい。

「視聴覚ブースか・・・。 いいもんだなあ・・・」

「・・・お前は何してるんだ？」

英語の勉強です。

「神様ー、栞さんともうちよつと話をしたほうがいいのではー・・・」

「話したくないなら話さなくていいだろ？」

ボクは話さなくても平気だぞ」

「それはお前の都合だろ」

「そもそも口なんて飾りだよ。

ゲームするのに必要ないパーツだし、ボイスコマンドを使用する
ゲームは

幸いクソゲーばかりだ」

※あくまで個人の見解です。

・・・。

「ならどうして、駆け魂が取り付いたんだ・・・？
ホントは話したいと思ってるのかも・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そんな月並な図書委員は却下だ」

「神様は、何様ですか・・・？」

神様なんじゃない・・・？

くそしてしばらくした後く

・・・・・・・・あーあ・・・。

「飽きた・・・」

「ずっと見ても飽きませんねく」

「お前は幸せだな・・・」

「え？」

英語なんてなくなっちまえ！

その時、バツという音が聞こえた。

見ると、栞が本を取り上げた状態になっていた。

「あー！ 神にーさま落書きしてるー！」

「おい、落書きはダメだぞ桂馬」

「お前の教科書だって落書きだらけだろ」

なぜ知っている！

授業中はゲームしているはずなのに・・・！

「それに、これは訂正だ。その作者のゲーム年表は間違いだらけだ」

・・・・・・・・・・よー分からん・・・。

「本とは情報だ。 正確でない情報なんて無意味だろ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

また栞が黙りこむ。
これ逆効果なんじゃ・・。

「訂正もすぐできないなんて、やっぱり本は前時代的だな」
「！」

「あ、あ・・・・」

あほおおーー・・・・・・・・」

スタスタスタ・・
そう言っただけは・・・・
何か前にもやったな。 このくだり。

「つか、桂馬が女の子を怒らせるのにも慣れてきたよ・・」
「怒らせてるんじゃない。 れっきとした会話だ」
「会話つつても「ばか」が「あほ」に変わったただけだろ」
「大違いだよ。 いいか」

物言わぬ

文系女子の女心

肝臓見るが

ごとくなり！！

けいま。

「で？」

「外側に表れないからといって、内側も静かだとは限らない。裏で大きな変化が起こってるかもしれないからな。」

小さなサインを見逃すと、後悔することになる」

「すると栞さんは肝臓系女子ですか？」

「とりあえず、今の流れを保つぞ」

「さらに次の日」

「おい、また落書きしてんのか・・・」

「シッ、栞が来た・・・」

栞は桂馬の前に立つや否や、桂馬の本を取り上げた。
そして・・・

「が、学校の本に・・・」

「それ、ボクの本」

え？ お前の？

「図書館の本じゃないよ」

それを聞いた栞は本をぐるぐる見回している。
おそらくシールとかを探してるんだろう。

「返して」

こいつひどすぎだろ・・・。

そして、ついに吹っ切れたのか・・・

葉は語りだした。

「・・・あなたは落書き禁止・・・いえ全部禁止・・・

あなたは出入り禁止・・・

あなたがいると乱れちゃう・・・

視聴覚ブースなんてできたら、あなたみたいな人ばかり来て
私の図書館が・・・」

あれ？ こいつ、結構話してない？

そこへ桂馬が一言。

「思ってることと話してることが逆になってる」
「！」

図星だったのか。

葉は去っていった。

・・・桂馬の本を持って。

「・・・ボクの本・・・」

「自業自得だ」

くさらにさらに次の日く

桂馬がゲームをしていると

本棚の影からこちらを覗いていた。

「出入り禁止って言ったでしょう・・・
分かってるんだ・・・

また私に嫌がらせするんだ……。」「
・・やっぱり話してるな……。」

そこへ桂馬が一言。

「普通に話してる」

「！」

栞はとっさに隠れた。

はああ、

意外とこいつの攻略ってすごいんだな。

そして桂馬の口から今までとは違う発言が。

「しかし、図書館こいはいいところだな」

「外はどこへ行ってもうるさいよ。ボクは誰にもジャマされずに生きたいのに」

すると栞は桂馬の向かいに座った。

「そうだよ……」

「図書館は素敵な場所だよ……。現実の喧騒けんそうから守ってくれる、紙の砦とりでなの……」

「ボク、桂木桂馬だ」

桂馬の自己紹介につられて栞は答えた。

「し、汐宮栞……ですが……」

「ご、ごゆっくり……」

栞は席を立った。

「すごいですね神様ー、あんな無口な娘とも仲良くなりかけてます
！」

「いっつもながら驚かせられるぜ」

「……人嫌い……視聴覚ブース……本が好き……ココロの声……
スキマはどこにある……？」

まだ難点も多いようだ。

すると桂馬が立ち止まった。

ドシン！

「痛え！ 鼻を打った……！」

「シッ！」

見ると栞が一枚の紙を眺めていて……そして、

ビリビリビリ……

破いて、どこかへ行ってしまった。

「何だ、葉のやつ・・・」

「何か変でしたね・・・このプリント復元してみます！」
.....。

「できました！　どうぞ、神にーさま！」

えっと、紙には・・・視聴覚ブースについて・・・？

「なるほど・・・これか・・・」

・・・来たな。

「エンディングが・・・」

見えたぞ・・・！」

18 わたしの中の・・・（後書き）

耕也「ていうか、なんなんだよあの前書き」

作者「前書きがどうしたって？」

耕也「知らない人もいるだろうけど。

俺は完全にあのやりとりを

「け○おん！」という漫画で見た」

作者「どんな？」

耕也「えーっと・・・「山」「ヤダ」「川」「ヤダ」・・・とかいう・
・」

作者「次回！ 栞編ラスト！

ちょっと短いけどね！」

耕也「なあ、あれってパクリ・・・」

作者「シヤラアアアアアアアアアップ！！！！！」

耕也「なんかお前、怖いわ・・・」

19 おしまいの時・・・（前書き）

作者「ついにここまで来ることができました。
皆さんの応援のおかげです」

耕也「今までありがとうございました。
いよいよクライマックスとなります！」

作者「さて、？ に向けて一言！」

耕也「・・・あ、俺が言うの？

・・・えーと・・・

・・・は、早い第二期ですね・・・」

作者「では、栞編完結です、どうぞ！」

耕也「やっぱスルー!？」

19 おしまいの時・・・

〽 栞攻略 最終日〽

「おかしいな」

「図書館のドアが開かないの」

「鍵はー？」

「パスワードが合わないんだって」

何か大騒ぎになってるぞ・・・。

「何かあったのか・・・」

「神様！ 栞さん、図書館に立てこもっちゃいました！ なぜでしょう！？」

マジかよ・・・。

だが、桂馬は冷静に言う。

「予兆はいくらでもあっただろ。 消防車ばかり見てるんじゃない」

それに関しては同感だ。

「だ、だが・・・これは栞を止めたほうがいいんじゃない」

「・・・止めるか止めないかは・・・」

ルートの展開次第だ・・・」
「？」

・・・。

「こらー、あけろー！」
「栞ー！」

下では何やら大騒ぎだな。

「準備完了です、神様！」

「・・・よし」

「行つてらっしゃい」

俺は桂馬を見送り・・・

「何言ってる、お前も来るんだ」

「・・・はああああ！？」

時すでに遅し・・・。

バゴオン・・・

「あて！」

「痛ってえ！」

俺たちは図書館の上から落ちてきた。

なお、俺は毎度のごとくつつさに隠れている。
さあ、桂馬の攻略が始まる。

「やあ」

桂馬は栞に話す。

「ボクも静かな場所が残ってるほうがいいからね。
応援するよ」

「・・・・・・・・・・」

普段ならここで黙り込んでいるはずだった栞は・・・
「・・・・・・・・」

桂木くん・・・！」

初めて自ら喋った。

ドサッ

「グエッ！」

おい、大丈夫か・・・？

数分後、桂馬と栞は隣に並んですわり、

桂馬はゲームをし、栞は本を読んでいた。

・・・なんだこれ。

完全にインドアクラブじゃねえか・・・。

・・・・・・・・しかも何も話しやしない・・・・。

俺がイライラしかけていたその時。

パツ・・

停電が起こった。

「ゲッ・・・」

俺はまだ良かった。

桂馬は、栞が驚いた拍子に本が崩れ落ち

ドサ、ガラガラ状態だ。

何に驚いたかって？

さあ、何だろねー？

「まったく、現実^{リアル}ってのはどこまで付きまとうんだ？

そっとしておいてほしいよ・・」

「・・・・・」

そして沈黙が続く・・・。

・・無期の後に・・。

栞は発した。

「私もずっと・・・静かにここで暮らしたいだけなの・・」

「それは、ウソだね」

「！」

「君は本当は人と話したいと思っているんだ。」

でも不安なんだ・・・

話をして嫌われたりするるのが嫌だから・・・」

栞は答える。

「・・・でも、そんなの誰だって・・・」

桂木くんだって・・・！」

そんな栞の言葉に、桂馬は答えた。

「ボクは、現実^{リアル}の世界なんてなんとも思っていない」

「・・・」

「だってボクは・・・ボクの信じる世界がある・・・！」
・・・。

「・・・」

「栞は今、本を守りたいのか？
それとも・・・」

外の世界からの逃げ場所を守りたいのか・・・？」

「・・・」

・・・

・・・」

栞は考え込み、いずれうつむいた。

いや、初めから答えは決まっていただろう。

そして桂馬は本に埋もれた葉を引き上げ・

「・・・ゆうき・・・」

あげるよ・・・」

「・・・」

・・・そして・・・

ボヒユウウウツ！

「お、出た」

・・・葉から出た駆け魂は上へ向かった。
おそらくエルシィが勾留しているだろう。

そして俺たちは静かに
この場を去ったのだった。

その後、栞は前よりは話すようになり、
処分される本は大幅に減ったという。

そして・・・

俺は落とし神の真の実力を、

知ることになる・・・。

それは桂馬宅にて起こった出来事だった・・・。

19 おしまいの時・・・（後書き）

耕也「クライマックスだったのに短いなあ・・・」

作者「どうもすいませんね」

耕也「こいつ、完全に投げやりだろ・・・」

作者「えーでは、ついに次回は最終話となります」

耕也「まあ実際にはラストじゃないけど・・・」

作者「今までありがとうございました・・・」

耕也「だからラストじゃな・・・」

作者「シャラアアアアアアアップツ!!!!!!!!!!」

耕也「もういいわ・・・ソレ・・・」

次回、最終回です。

20 神以上、人間未満・・・The Last・・・（前書き）

作者「ついに最終回です。今までありがとうございました」

耕也「だから最終回じゃねえだろうって」

作者「事実上最終回だからいいんだよ。

それより、お前？で大変なことになるぞ？」

耕也「・・・え？」

作者「では、最終回です。どうぞお楽しみください」

耕也「お、おい、何だよ！ 大変なことって！！」

20 神以上、人間未満・・・The Last・・・

ゝある日の桂馬宅ゝ

落とし神こと桂木桂馬は地獄から逃げ出した悪人の魂、
駆け魂を4匹も出した。

しかし、彼の實力はこんなものではなかったのだ。
俺はこの日すごいものを見た・・・。

それはまさに 神のみぞ知るセカイ だった・・・。

「ふあーあ・・・眠い・・・」

「おはようございます、耕也さん！」

「おはよ」

エルシィと挨拶を交わし、俺は椅子へ座る。
そして朝食のパンを頬張った。

「ん？ 桂馬は？」

「えーっと・・・あ、起きてきましたよ」

エルシイの視線の先には桂馬が・・・。

ヒヨオオオオオオオ・・・

うわあああああつ!?

妖怪いいいっ!?

「キヤアア! アンデッド・・・・・・・・か、神にーさま!?’
え?

・・・あ、ホントだ。

桂馬だ。

しかし、妖怪みたいな表情してるぞ・・・。

「わー、ダメダメ! 神にーさまはかわいい顔ぐらいしか
とりえがないのにー!」

グダグダになっちゃってますー!」

「今、さらっとひどいこと言ったなお前!」

すると、桂馬が喋った。

「ゲ・・・」

げ?

「ゲームが足りないいいいいいっ!」

「きゃあああー!」

「もうそのコントはいい」

「駆け魂を追いかけてたせいで、ろくにゲームをやってない!」
「・・・いや、お言葉だけど、結構やってた・・・」

「うるさい！ あんなもんで足りるか！」
あれだけやっても足りないのか、お前！

「今、こうしている間にも、ボクの部屋にはどんどん
ギャルゲーが溜まっていつてるんだぞ！」

「そーですねー」
知らんけどな。

「ゲームはエネルギーなんだ・・・空気なんだ・・・
ゲームを・・・ゲームをくれえ・・・」

なんか、初めて会った時ぶりに
桂馬が気持ち悪いな・・・。

そして桂馬は立ち上がり、

「今からボクは落とし神モードに入る！」

絶対にジャマするな！」

そして去っていった。

で、俺たちは桂馬の部屋の前にいるわけだ。

なんか、エルシィが扉を叩きまくっているが・・・。

「おにーさまー！ おとしがみもーどってなんですかー！ー！
神にーさまー！ー！」

「・・・今さらながら、あいつって変だよな」
「は、はい・・・」

そしてエルシィが何かを思いついたようだ。

「あ、羽衣！ 神にー様の部屋の鍵に変形させましょう！」

「それって何気に犯罪じゃね！？」

「できましたー！」

なんで無視するのー！

ねえ、どうしてえー！？

ガチャ

おいおい、開けちゃったよ・・・。

俺たちはこっそりと桂馬の部屋に入る。

「しかし、桂馬の部屋に入るのは初めてだな」

「そうですね・・・」

そしてそこで俺たちが目にした光景とは・・・。

『これだ！ 1 ・ 2 ・ 3 ！』

「どうかしたんですか？」

「ハハ、何でもない」

俺たちが見た光景・・・それは・・・。

なんと桂馬が6つのモニターに向かって

6つのリモコンを使い、ゲームをしている光景だった。

「さあ、珍百景 登録なるか」

「本当に、どうしたんですか？」

「ハハハハ、何でもないよ・・・」

「うお・・・何か、すげえな・・・」

桂馬があまりにも高速でゲームをしているために、
残像で、桂馬の手が6本に見える・・・。

「・・・でも、何の意味があるんですかねー・・・？」

「さあ・・・」

・・・確かに何の意味があるんだ、これに。
絶対的に無意味だろ・・・。

そして聞こえていたのか、
桂馬は話し出した。

「きっかけは、時間がもったいなくて二つのゲームを
同時に攻略しはじめたときだ・」

それっておもしろい？
ねえ、おもしろい？

「だが、今では6つのゲームを同時プレイできるようになった！
デイス イズ ア 落とし神モード！
フハハハハハ！」

よく分からんがすごいらしい。
さらに桂馬のこのモードのすごいところは・・・。

「！」

「右上と左下、いい話だなあ・・・。
さすがのボクも参った・・・」

ちゃんと別々に感情移入している！

「よし、3時間で6本コンプ。

・・・そろそろサイトの更新するか・・・」

桂馬はPFPを取り出し、いじり始めた。
そしてその時。

ガタッ

桂馬の手からPFPが離れ、落ちた。

「・・・どうしたー？」

「・・・ただし、知力、体力、集中力を研ぎ澄ませるこのモードは・

同時に使用者をむしばむ、諸刃の剣もろは へらぎ・・・！」

「1時間のモード発動は・・・

使用者の寿命を3年も縮める！」

「マジで!?!」

「・・・ような気がするほど疲れる」

おい！

疲れるだけか！

「フ、構うもんか現実リアルの命なんぞ・・・

積みゲーを作るならそれこそ死んだほうがマシだー！

フ・・・所詮血塗られた道よ・・・フフフ・・・フハハハハハ・・・
」

「・・・久々に神様が気持ち悪いですー・・・」

「奇遇だな。俺もさつき同じコトを思ったよ・・・」

エルシィは部屋を出て行った。

まあ、おそらく・・・いや絶対に呆れたのだろう。

（3時間後）

「フフフ・・・さらに6本クリア・・・だがやや疲れたかな・・・」

ウソ付け、絶対ややじゃねえだろ。体中から疲労オーラが溢れ出ているぞ。

「でもまだこんなに残っている・・・。

フフ、ギャルゲーよ・・・。

毎月たくさん出てくれてありがとう！」

「・・・もうワケ分からんなこいつ・・・」

「・・・よし、ゲームは一日、100時間！」

・・・しばらくして、桂馬は俺に話しかけた。

「耕也、世話になったな。

ボクはこれからゲームのセカイへ行く」

「・・・は？・・・いや、世話になってるの俺なんだけど・・・」

「ではな・・・楽しかったよ・・・」

「あーあ・・・ついに桂馬が壊れたか・・・」

「・・・さて・・・サ○セスでもするかな」

そして俺は部屋を立ち去った。

誠にあっけないが、コレで物語は終わる。
だがこれで終わりではない。
きっとまた続きは描かれるはずであろう。

そして、この日俺は
落とし神の真の力を知ったのだった・・・。

そして、早くも彼のゲームライフは終わりを告げ
再び、駆け魂に追われる（実際には追う立場だが）日々が始まる・・・。

そして、俺にも・・・。。。

N o w L o a d i n g ∴

20 神以上、人間未満・・・The Last・・・（後書き）

「God Only Knows！」はこれにて連載終了です。
いままでありがとうございました。

「？」もどうか、お読みになってくださいね。

「？」では、さっき言ったように耕也が大変なことになります。
お楽しみに！！

耕也「だから何なんだよ、大変なことって！！」

作者「今言ったら面白くないだろ？」

耕也「気になるだろうが！」

作者「フツ、これだけは教えられないな」

耕也「チツ・・・ケチめ」

作者「ケチで結構」

耕也「ところで、この小説の投稿日って2月だよな？

何で3月の投稿部分がないんだ？」

作者「こっちにもいろいろあるんだよ。

受験やらパソコン禁止やら部活やら学校行事やら」

耕也「とりあえず、お前が超学生だということは分かったよ・・・」

作者「分かってくればいいのだよ。学生は忙しいんだ。」

耕也「じゃ俺はどうなる？」

作者「・・・・アニメ本編では、もうちひろ攻略が終わってるんだよな」

耕也「やっぱスルーですか!？」

作者「早いもんだ。この間、2期が始まったと思ったら、もう純の攻略に突入とは」

耕也「なんか、いろいろと問題が発生するからそれ以上は言うな・・・」

作者「分かった分かった。さて、

今まで読んでくれてありがとうございました。

耕也が言うように、まだ物語は完結はしません。

「?」での桂馬や耕也の活躍をご期待ください。では、また会う日まで」

耕也「アディオス!!」

!!
「God Only Knows?」!」も読んでね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8117q/>

God Only Knows !

2011年6月7日10時32分発行